東方學報 京都第70册(1998)：566－506頁

アウグストゥス靈廟と大ストゥーパ
――車輪狀構造の由來――

桑 山 正 進

1．車輪狀構造をもつストゥーパの遺構
2．法輪說批判
3．初期ストゥーパの構造
4．車輪狀構造の地方差とその意味
5．アウグストゥス靈廟
6．車輪狀構造導入の積極性
7．導入の年代と意義
表1　車輪狀構造をもつ遺構とその細部要素
表2　法輪の輻の數
插圖目錄
參考文獻

ストゥーパは，地方によって用材にちがいはあるが，煉瓦，石，土をつかって，下から基壇(圓形あるいは方形)，圓胴部，伏鉢，ハルミカ，傘の順に築いている。そういったストゥーパで發掘を經た例をみると，內部に壁を車輪狀に造ったものがある。車輪が，轂と輻と輪で成るように，ストゥーパのなかにつくられたものも，上からみるとそうみえるので，ここでは車輪狀構造と呼んでおく。すなわち，轂にあたる圓形あるいは正方形の施設がストゥーパの中心にあり，そこから輻壁が放射狀に外輪壁にむかっている。轂と外輪との間に，ひとつかふたつの同心の環狀壁をおいているものもある。この構造は，ストゥーパのいちばん下の，圓形基壇の內部に，一定の高さの壁構造として發見されることが壓倒的に多い。基壇より上の圓筒部を含んだ部分にまでかかることもあったかもしれないが，發掘例ではそれを確かめられない。そんなに高く殘った例がないからである。しかし特異な例として伏鉢という高い部分にそれを置いたストゥーパも實は存在する。

こういった車輪狀構造をもつストゥーパは，若干の見落としはあるかもしれないが40基たらずが知られている(圖1)。ただしその中で22基はNagarjunakondaというひとつの場所に集中しているので，それを除くと16基がインド＝パキスタンの亞大陸に分布していることになる。とすると，車輪狀構造のストゥーパは，發掘されたストゥーパ全部の

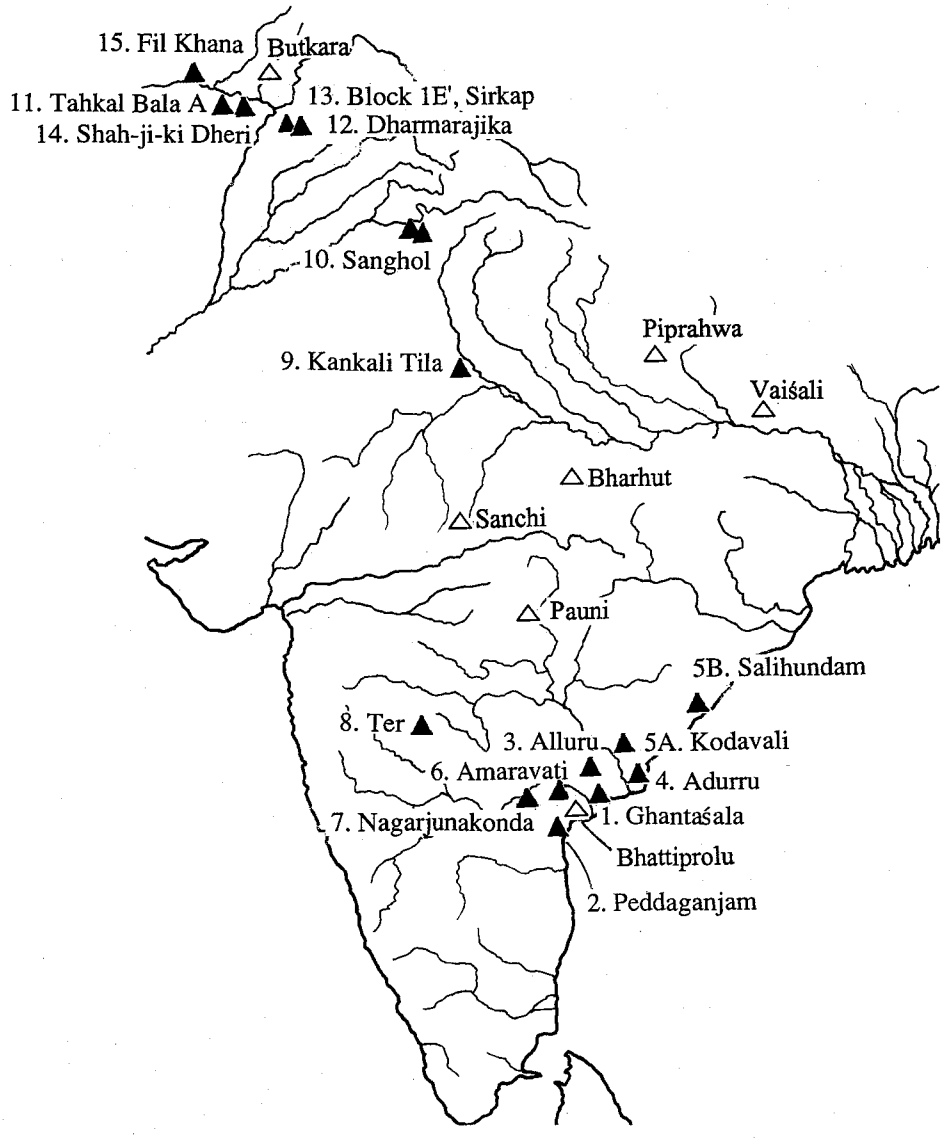

圖1　車輪狀構造をもつストゥーパの分布（白ぬき三角は車輪狀構造をもたない大ストゥーパ）

數にくらべたら，そんなに多いとはいえない。しかしそれがまったくないものがあるのだから，車輪狀構造を採用したとなると，いかにもそのストゥーパは特徵的である。さらに，この形は建築が終われば內に隱されてしまい，外からはそれがあるとはわからないのであるから，いよいよ不思議である。

そんな點を捉えて，これは「法輪」を模したものであるとか，太陽を象徵しているのだとか，象徵論的な意味をもたせる說明がしばしばおこなわれる。しかし車輪狀構造が高さ

をともなう壁構造であることを考えると，どうもこの見方だけですべてを説明しているようにはみえない。それならば，車輪狀構造とはなんであるのか，なぜそんな構造がストゥーパのなかに採りこまれたのか。どのようにしてこの構造がインドにあらわれたのか。そうしてそれはストゥーパに關してなにをわれわれに知らせようとしているのか。これらの疑問を解くためには，まず，できる限りおのおのの發掘例にあたってその實際を確かめねばならない。そうして見えてくる事實は，法輪說などに象徵されるような，そんな思弁的な問題とは無關係であり，インド內部で發生したものでもなく，圓筒形建築をつくる外來の技術ではないかということである。

1．車輪狀構造をもつストゥーパの遺構

まず以下のように車輪狀構造の遺構を觀察してゆくが，最初の8個所は1例をのぞいてみな Andhradeśa に集中している。この分布の偏在性はのちにのべるように車輪狀構造の使われた時代を反映している（圖1，表1）。

(1) *Ghantaśala*（圖2）

Ghantaśala は，現 Andhra Pradesh，クリシュナ地方の Masulipatam の西20キロにある小邑の名をとってつけられた佛教寺院跡である。プトレミー（VII, 1, 15）は Maisolos 河口を敍したのち，ローマの物產を荷揚げする港町として Kontakossyla を述べる。これは Ghantaśala 出土の大理石欄楯柱の碑文にみえる Kaṇṭakasola（Skt. Kaṇṭakaśaila）にあたるという（Vogel, 1947－48, p. 1）。この佛教寺院跡を發掘した Rea は，巨大なストゥーパの構造について記述している（Rea, 1894, pp. 2－3）。それによると，Ghantaśala は煉瓦造である。煉瓦自身はそれほど燒きがよくない。車輪狀構造は，外輪壁が厚さ 6.15 m で，そとづらの直徑 33.3 m，そのなかに厚さ 1 m，直徑 16.75 m の同心圓壁がある。中心の轂にあたるところは方形に內實に煉瓦をつみ，中心に中空の細いシャフトを殘している。轂と同心圓壁との間は，東西南北各3本の直交する壁で方格を造っている。分厚い外輪壁と內側の同心圓壁との間には16本の輻壁がある。このようにしてつくられた壁の間の空間は黑土でしっかり埋め盡くされている。

ストゥーパの上部構造について Rea は，內部に施されたこのような壁の存在から，數層の構成であったと予測している。もし外輪壁がそのままドーム狀に立ち上がっていたのなら，これら內部構造の壁は外壁を補強するためだけのものであったであろう。しかし，6.15 m という外輪壁幅は異樣に分厚い。伏鉢がはっきりわかっている例では，外輪壁は普通もっとうすい。したがって，Rea は，ドーム部は外輪壁から立ち上がっていたのではな

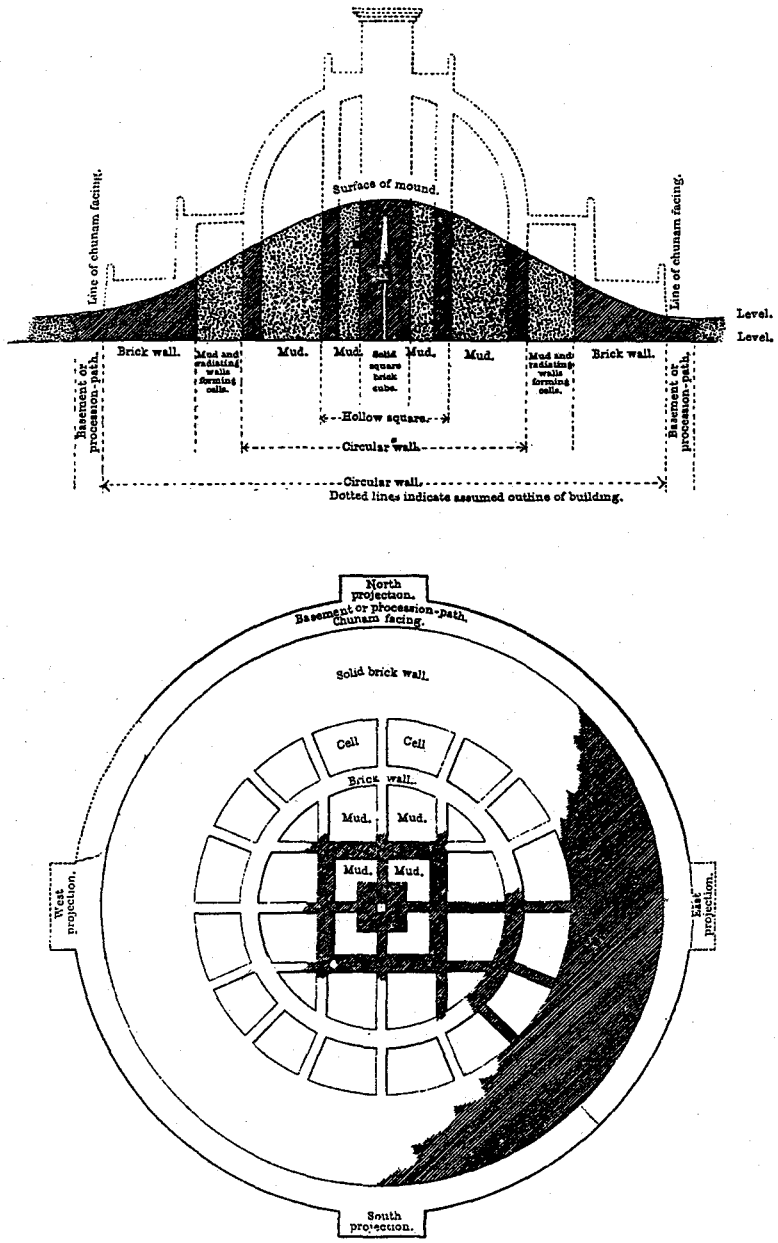

圖 2　Ghantaśala のストゥーパ平面立面圖

く，同心圓壁の上に立ち上がっていたと推測している。同心圓壁の厚みが伏鉢を立ち上げるのに適當な厚さだと判斷したためである。

平面圖と斷面圖に基づいてみると，Rea が考えたこのストゥーパの外形とはつぎのとおりであったろう。同心圓壁の上に立ち上げられた伏鉢がある。伏鉢は內實ではなく，分割されていて，中心の方形內實の煉瓦積みによって支えられている。16 本の方格の壁と輻壁がこの方形中心部と同心圓壁をしっかり結合している。分厚い外輪壁，およびこれと同心圓壁とをむすぶ 16 本の輻壁で構成される圓環部分，このふたつの部分を丈が高い圓胴部と Rea は考えている。伏鉢まで內部がこのような壁構造であったと考える必要はない。このことはのちに明らかになろう。

(2) *Peddaganjam*

Rea はさらに Ghantaśala と同様の構造をもつ Peddaganjam の第二ストゥーパを記錄している (Rea, 1894, p. 3)。平面形でみると，煉瓦造りの，ふたつの同心圓壁をもっている。外側の環狀壁は，厚さ 1.15 m を含んで直徑が 11.65 m であり，內側の環狀壁は，厚さ 0.9 m をいれて直徑 6.45 m ある。兩方の環狀壁は 1.45 m 離れ，その閒は放射した 12 本の輻壁が兩者を結んでいる。輻壁のうち 4 本だけが內側の環狀壁から中心にむかって出っ張っている。Rea はストゥーパの內部についてこれ以上のことをいわない。しかし，外輪壁と內側の環狀壁をとりむすぶ輻壁が 12 本あるストゥーパの場合，內側の環狀壁から中心に向かう輻壁は普通 8 本であり，4 本しかない例はほかにない。ほかの 4 本は既にくずれていたのかもしれない

(3) *Alluru*

Mitra によれば (Mitra, 1971, p. 28)，Alluru の煉瓦積みストゥーパは 16 本の輻壁が直徑 9.8 m ある轂部から出て，外輪壁に達しているという。圓胴部の直徑は 23 m。石灰岩の柱が，ストゥーパ近隣の集落にあるシヴァ寺院境內で發見されている。それには蓮華紋の半圓メダイヨン裝飾と刻文があった。刻文の文字は 2 世紀という。これを理由に Mitra は Alluru ストゥーパの年代をせいぜい 2 世紀であるとみている。

(4) *Adurru* (圖 3)

東部Godavari 地方の Adurru でも二重の同心圓壁とそれらをつなぐ輻壁で構成されるストゥーパ構造がある。內輪は，直徑 5.3 m の圓形車軸部から出る 16 本の輻壁で分割され，內輪から外輪へは 24 本の輻壁が出ている (IAR 1985－86 A, pp. 1－2, pl. I)。發掘者によると，「外輪は立ち上がって圓胴部をつくり，その上面は約 1 m ひっこんで伏鉢が立ち上がって

いる」。ストゥーパの圓周 64 m，直徑 20.4m，殘高3.45 m である。ストゥーパマウンドは全部で 5 層あったが，下から 2 層目が煉瓦片を含む土層であり，ストゥーパはこの層の上に基礎をおいた。土器型式とストゥーパ建築型式から，2－3 世紀であると，發掘者はいう。

(5) *Kodavali and Salihundam*

東 Godavari 地方のストゥーパ遺跡 Kodavali については輻壁の數，規模についてはつまびらかではない。ただここは煉瓦ではなく，石積みのストゥーパである。Sarkar によると，テラス狀の平坦な場所に立ち，基礎部にあたる車輪狀構造は內實の轂部と二重の同心圓壁とをもっているという (Sarkar, 1960, p. 78)。Salihundam に關しても同樣に情報は得られていない。ここではひとつの小塔が，車軸と，8 本の輻壁，外輪壁とで構成される車輪狀構造である (Mitra, 1971, p. 222 ; Margabandhu, 1985, p. 36)。

(6) *Amaravati*

誰も Amaravati の大塔に車輪狀構造があったとはいわない。Barrett (1954) は車輪狀構造にふれながらも復原研究には反映していない。Knox (1992) は Barrett を襲っているだけである。ここはふるくに貯水池造成のためマウンドの內部をおおきく剔りとってしまったので，めぼしい遺構はなにもないのであるが，Burgess は，Amaravati 大塔の記述に際して大規模な煉瓦構造に注意している。それはすでに Mackenzie が發見したもので，大塔をとりまく欄楯から約3.6m 內側にあった (Burgess, 1970, p. 20)。Barrett も大塔の復原研究に際してこの煉瓦構造を一應重視している。問題の煉瓦構造は，ストゥーパ南西の內側に，ストゥーパ外緣と同心圓狀に造った環狀壁の一部で，長さ 12 m 測り，幅は 2.4 m，殘高 4.3 m ある (圖 4) (Barrett, 1954, p. 35)。Mackenzie は，ストゥーパの南側にある石を含んだ組み物は多分ストゥーパ內部の壁の一部であろう，とすでに言っている。土採りのときいっしょに取り除いてしまったが，おなじような組み物がストゥーパを一周していたという村人の證言を記錄している (Barrett, 1954, p. 35, para. 2)。

これを Burgess はストゥーパのテラス (基壇の上の pradakshinapatha) を受ける基礎構造とみるが，伏鉢がここから直接立ち上がるのか，あるいはまた別のテラスがつくられ，そこから形成されるのかは，明言していない (Burgess, 1970, p. 20)。一方，Barrett はこう考えた。Alluru, Ghantaśala, Nagarunakonda などの大ストゥーパには外緣に分厚い環狀壁があり，その內部はかならず輻壁で補強されている。Amaravati の分厚い壁もこれらと同じ性格のものであり，これは車輪狀構造の外輪の一部であり，伏鉢を立ち上げるための內部の構造であると。また Mitra は伏鉢の內部は內實でないとする點で Barrett を支持

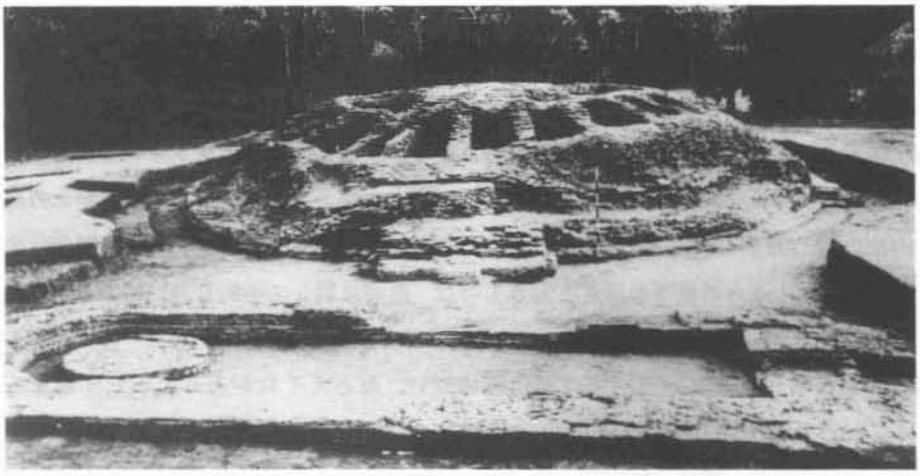

圖3　Adurru のストゥーパ

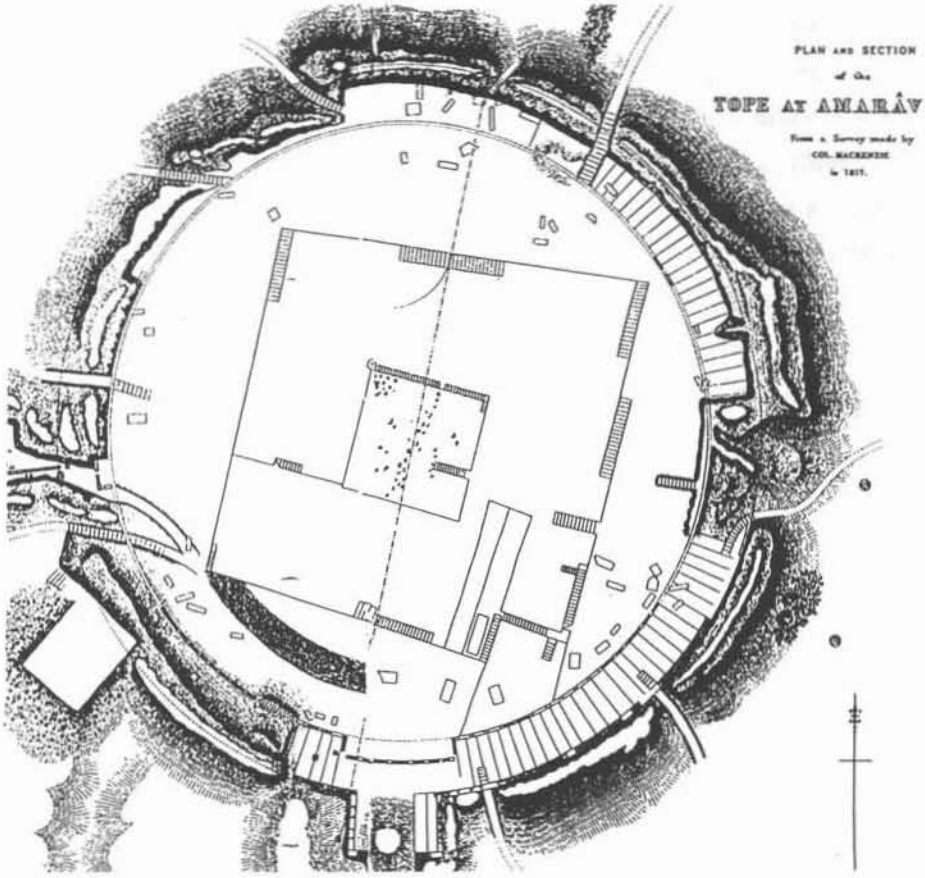

圖4　Mackenzie による Amaravati 大塔平面圖

するが，この分厚い壁が内側を車輪狀の輻壁で補強されていたとする點では用心ぶかい(Mitra, 1971, p. 203, n. 11)。しかし Barrett にかわる案を出してはいない。

それなら，このように分厚い，ストゥーパ外輪壁とはなんであったのか。もしこれが車輪狀構造の要素にならないとしたら，そのような環狀壁は内實の大ストゥーパにも認められる構造であったのかどうか。同心圓壁と輻壁をもつストゥーパでは，あきらかに外輪壁と内部の同心圓壁との厚みの差はおおきい。あるいは同心圓壁がなく，外輪壁だけのストゥーパでも，その外輪壁の厚さというものは，直徑に對して不釣り合いにおおきく設定されている。すなわち Nagarjunakonda では，第 7，20，22，38 ストゥーパのように，内實に煉瓦を積んだストゥーパには環狀壁はない。たとえそれがあったらしくみえるストゥーパでも環狀壁は至って薄い。したがって，Mackenzie が Amaravati でみつけたこの 2.4 m 幅の壁の一部は，輻壁を内部にもつ車輪狀構造の外輪壁の一部である可能性が高く，車輪の直徑は曲率からみてだいたい 41 m を測ったであろうことは疑いない。すくなくとも Andhra 地方において分厚い外輪壁は車輪狀構造を持ったストゥーパにはつき物，すなわち車輪狀構造の重要な要素のひとつである。

しかしながらこの環狀壁が最初のストゥーパの一部であったのか，あるいはのちの段階のストゥーパに屬するものであったのか，これはなかなかむずかしい問題である。大量に出土した碑銘によれば，Amaravati が紀元前 3 世紀以降に佛教の重要な一中心であったことははっきりしている。Sircar は刻文のある石柱斷片を Aśoka 王柱の破片とみて大塔の内核部分はすでに前 3 世紀には存在したとしている (Sircar, 1963－64, pp. 40－43)。一方，Chandra は同じ刻文に基づいて大塔を前 2 世紀の創建とする (Chandra, 1919－20, p. 261)。しかしストゥーパの内核がそんな時代まで遡るとしても，その時代のストゥーパの規模はずっと小さなものだったはずである。問題の環狀壁の直徑は 41 m もあり，前 3 世紀のストゥーパにしてはあまりにもおおきすぎる。環狀壁が Amaravati最初の大ストゥーパの一部とはおもえない理由である。

Mitra によれば，最近の發掘によって現存の ayaka は最初のストゥーパよりあきらかにあたらしいものであり，おそらく 2 世紀まで下がると。つまり，南の ayaka の内積みとしてつかわれていた石がふたつあり，ひとつはストゥーパの周圍にたっていた欄楯柱を再利用したもの。どちらにもほぞ孔があり，ほぞ孔のなかに奉納品がはいっていた。その奉納品のことが Burgess の圖版 LX の Inscription 47 にみえ，この刻文は 2 世紀のものであるという。さらに Lüders の示すある刻文 (Lüders, 1973, p. 147, no. 1248) は，Mahacaitya 西門の法輪が Satavahana 朝の Purumavi (AD 130－159) 時代に奉納されたことを記している。すなわち Amaravati の Mahacaitya つまり大塔は，2 世紀の第 II 四半世紀に ayaka と塔門とが施與された。ここに問題としている外輪壁の外面は欄楯と 3.6 m 離れつ

つ，平行に造られている（Burgess, 1970, p. 20)。大塔外回りが造營されつつあったのが2世紀の第Ⅱ四半世紀ごろであるなら，大塔自身はおそらく1世紀末から2世紀はじめまでには完成していたであろう。そうしてこの大塔は基礎に車輪狀構造をもっていたのである。

(7) *Nagarjunakonda*

3－4世紀の年代があたえられているNagarjunakonda佛教僧院群のうち，車輪狀構造をもつストゥーパは24基ある。計測値など細部についてわかっているのはそのうちわずか14基である。最大かつ最初のストゥーパはMahacaityaとよばれた第1ストゥーパである（圖5)。これはIkshvaku朝始祖Chantamulaの息にして後繼者なるVirapurushadattaの第6年に建設されている（Sarkar, 1960, p. 68, n. 1；J. Ph. Vogel, 1929－30, p. 3)。3本の同心圓からなり，外緣の東西南北四方に方形の突出部をもつ。外輪の直徑7m。最奥の圓形部のみが內實の轂壁から發する8本の輻壁で構成される。そのほかの同心圓がつくる空間には，16本の輻壁をおいている。

第5ストゥーパは，Virapurushadattaの息であるEhuvala Chantamulaの卽位第2年の建設，第9ストゥーパは，その第8年に修築された（Sarkar, 1960, p. 69；IAR 1957－58, pp. 8－9)。雙方とも二つの同心圓と8本の輻壁をもち，中心は煉瓦を內實に積んでいる。第5ストゥーパの外輪壁內側の空間は12本の輻壁，第9ストゥーパでは16本である。第5ストゥーパの外輪壁外周の直徑は14.7mあり，第9ストゥーパのそれは12.5mある（圖6)。Sarkarがいうように，8m以下の直徑をもつストゥーパは，10m以上の直徑をもつストゥーパより，輻壁の數が少ない。第30，第32Aストゥーパ（6本)，第14，27，52，54ストゥーパ（4本）はこのことを示している。直徑10m以上のストゥーパは中心に8本をもつか，あるいは轂壁から8本が放射している。これらよりもずっと小さいストゥーパでは，環狀壁がひとつだけで，同心圓壁を欠くのが普通である。その場合壁幅が厚いことは興味ぶかい。しかし，直徑10m以上の大規模ストゥーパでも，第6，第21ストゥーパ（15m）のように，同心圓壁を欠くものがある。

車輪狀の基部をもったNagarjunakondaのストゥーパのほとんどが中心に圓形の轂壁をもち，みな煉瓦で內實につくっている。二三，內實にはつくらず，圓環につくるもの（第14，第52，第54ストゥーパ)，箱形方形につくるもの（第3，第9ストゥーパ）がある。方形の場合，輻壁は方形の四角，ないし一邊の中心から出る。第27とか第108ストゥーパはこういった轂壁がなく，直接中心へむかって輻壁が收斂する。

(8) *Ter*

Maharashtra州南部のTerは，*Periplus Maris Erythraei*（Casson, 1989, pp. 83, 211, 213, 292；

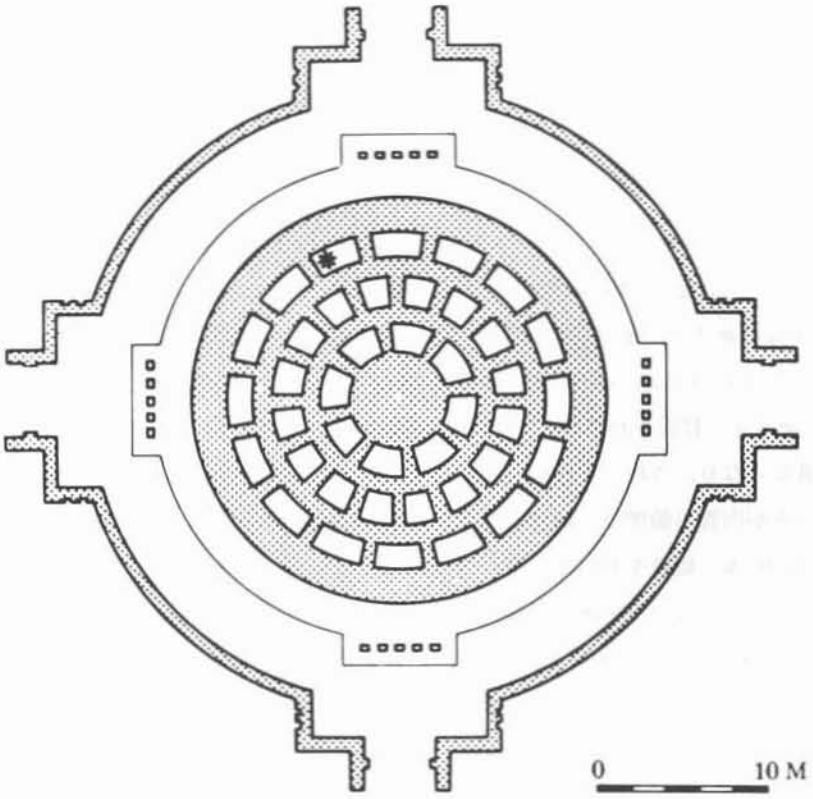

圖5　Nagarjunakonda の第1ストゥーパ平面圖

圖6　Nagarjunakonda の第9ストゥーパ

『エリュトラ海案内記』第50節：村川，1946, p. 1015）に記述されたTagaraである。綿布の一大集散地として大きな市であったTagaraは，キャンベイ灣内にあった港灣都市Barygazaに通じる一方，南東へKrishna河をくだれば，Amaravati方面に至る要衝にあった。Terのストゥーパは最近の發掘で，煉瓦造りの車輪狀構造をもち，その基部，つまり車輪狀の部分だけがのこっていたことがわかった（IAR 1967－68, p. 25）。直徑は26 m。報告によると，circular ribs of bricks with eight spokesがあり，pradakshinapathaがあり，四方向にayakapathaが突出しているという。報告は短く，平面圖，寫眞，細かい計測値もないので，circular ribsと記述されたものがどんなものかわかりにくい。報告によれば，石工の名前を記した刻文とPurumavi王發行の貨幣とから，ストゥーパの年代は2世紀前半であるという。方形の前堂を木材で架構した跡のある前方後圓平面のストゥーパ祠堂が大ストゥーパのそばにあり，それは3回修復され，Purumavi王の貨幣がここでも出土した。この佛教寺院の年代を正確に求めるについては最終報告をまつしかないが，ローマ貨幣の土製倣製品や地中海型式のガラス瓶が出土していることは注目すべきである。

遺跡はM. N. Deshpandeが發掘の15年前に發見し，その際，ストゥーパ丘附近の畑や，Terの町をはさんでストゥーパと反對側にある邑のヒンドゥー寺祠のそばなどから彫刻のある石灰岩板石5枚を發見している。ストゥーパ丘附近の畑ではさらに3枚がその昔Fleetによって發見されている（IAR 1961－62, p. 102, pls CXLIX, CL）。これら石灰岩の彫刻がAmaravati派の系統にあることをMitra（1971, p. 151）は認めている。なおTagara-Terに關してはCimino（1994, pp. 175－181）にDeshpandeの最近の短報と文獻がある。

以上の諸例はほとんどが半島部インドであるが，車輪狀構造を容れたストゥーパはMaharashtraからはるかに北，Vindhya山脈をこえても知られている。それはみなMathuraより北西に限られる。MathuraのKankali Tila，Sanghol，TaxilaのDharmarajika大塔とSirkapの1基，PeshawarのTahkal BalaとShah-ji-ki Dheri，それにJalalabadのFil Khanaである。以下にそれらを檢討するが，この分布もまた半島部とおなじように，そこで車輪狀構造がつかわれた時期は限定されている。

(9) *Kankali Tila*（圖7）

このJainaのストゥーパについて得られる情報はV. Smith（1969, pls. II－III）の解說文と簡單な平面圖だけである。平面圖によれば，8本の輻壁がみとめられる。そのいくつかが環狀壁をこえて外側に突き出ている。そうすると，突き出た壁は外輪の外側をささえる扶壁かといえば，そうではあるまい。ストゥーパの圓形基壇の外側に扶壁がある例はないからである。平面圖をよくみると，これら扶壁樣の壁のうち北へのびる一本の壁が，それと

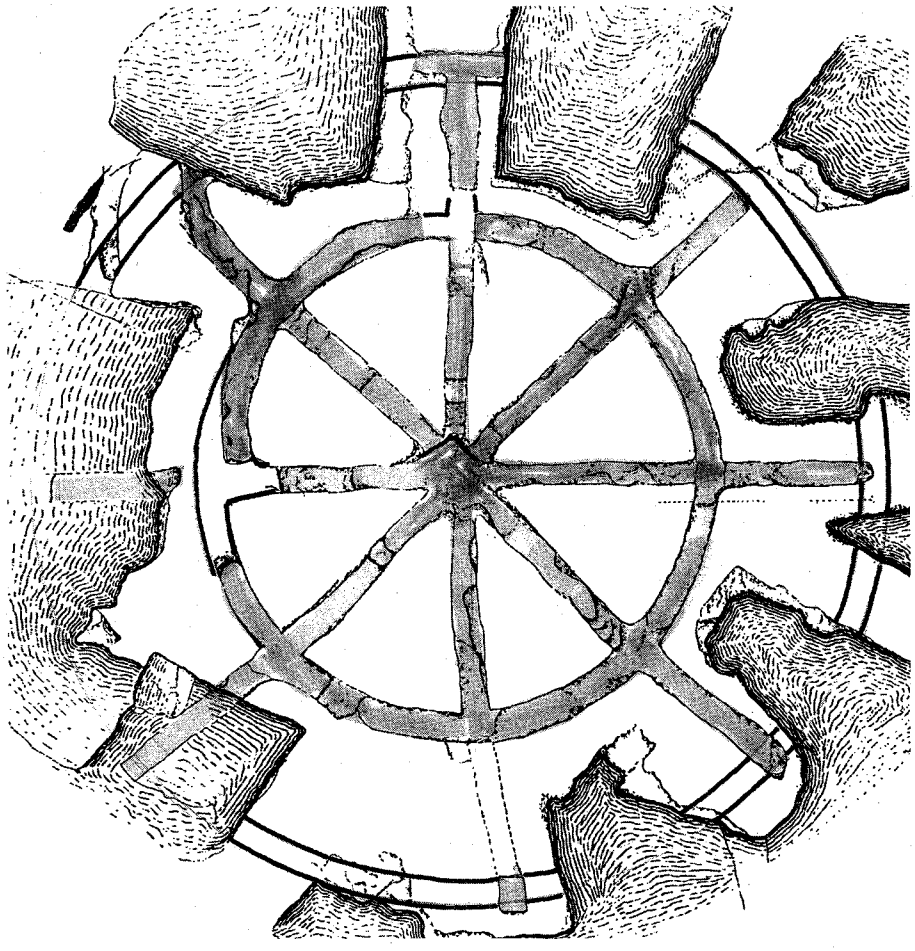

圖7　Kankali Tila のストゥーパ平面圖

直交する壁に突き當たっている。直交する壁とは，つまり外輪壁である。したがって Kankaki Tila のストゥーパの下部構造は，ふたつの，中心を同じくする環狀壁と，8本の輻壁からなる車輪狀構造である。しかし，不思議なのは，南部の諸例でふつうにみられる轂相當の設備がここではなく，輻壁は中心に向かって收斂するように造られている點であり，車輪という形を正確にいえばとっていない。南部，たとえば Nagarjunakonda では，直徑のきわめて小さい，第27とか第108ストゥーパ（4.5 m）でも轂の壁構造はかならずある。Smith の平面圖の縮尺にしたがって測ると，Kankali Tila は直徑が19 m というおおきな規模である。南部ではそんなにおおきなものなら當然あったはずであるが，ここにはないのである。不幸にも19世紀，20世紀初頭の發掘は美術優品の探索に熱心であり，ストゥーパの遺構自體の研究はおろそかであり，直接年代の決め手になるようなものをみなこわしてしまった。いま年代に辛うじて結びつくものといえば，ストゥーパのまわりで出

土した，マトゥラー石の彫刻しかない。すなわち11年銘のあるKarttikeya立像，35年銘のあるTirthankara立像を彫った柱，しゃがんだSurya像。みなKushan時代だという程度のことしかわからない代物である（Huntington, 1985, pp. 160－62）。ただしSanghol第1ストゥーパ出土のマトゥラー彫刻との類似をS. P. Gupta（1985, p. 50）は主張している。Sangholはやはり車輪狀構造をもったストゥーパであり，以下にこれについてのべる。

(10) *Sanghol*（圖8－圖10）

LudianaとChandigarhの間にあるSangholは，SGL－5とSGL－11の發掘區で煉瓦積みの佛塔が都合3基出土した。それぞれ第1，第2，第3ストゥーパと名づけられた。第1ストゥーパの脇，表土を取り除いたところに，解體された欄楯が一括埋藏してあった。これによってSangholの名が知られた。ストゥーパ自身に關する報告はインド考古局年次報告の域を出ず，情報はすくない。

第1ストゥーパは，車輪狀平面の圓筒形とそれを取り圍んだ方格とでつくる構造である（圖8）。轂部として中心には，ややおおきい，中空の圓筒（外徑3.24 m）をつくり，そこから12本の輻壁が出て，第一の同心環狀壁（外徑5.04 m）と結合している。Gupta（1985, p. 50）の平面圖で測ると直徑7 mある。この環狀壁の外側には分厚い，第二の同心環狀壁（外徑13 m；厚さ1.07 m）があり（圖9），これらを24本（殘ったのは20本）の輻壁がむすんでいる。分厚い環狀壁の外側へはさらに32本の輻壁が出て，第三の同心環狀壁（外徑16.3－16.8 m）に達している。この壁がもっとも外側の同心圓壁であるが，不思議なことに，厚さはわずか30 cmしかなく，最もちいさい。輻壁のうち殘りのよいもので，高さ1.18 mである。輻壁と環狀壁でつくる空間は土で充填してあった。

このストゥーパが特異であるのは，これら全部が形成するひとつの圓筒形が，一邊17 mの方形の壁の內側にすっぽりと入れこになっていることである（IAR 1971－72, p. 39）。方形の各邊は，その外側に不規則に方格を壁でしきった複雜な構造をつくり，その最も外側に階段狀のものが一段ついていたようにみえる。第2回目の報告では，遺構全體が自然層のうえにのっていたとする（IAR 1972－73, p. 28）。ただし第1回報告は，ストゥーパ建設前の層として一層あり，黑灰色粗陶を包含する堆積層である。この灰陶はNBP（北方黑色磨研土器）と普通伴出する形式だという（IAR 1971－72, p. 39）。轂部からは灰，炭，齒（1本）や骨片とともに灰色の滑石製舍利容器の底部と蓋が出土している。蓋にKharoshti銘Upasakasa Ayabhadrasa」が認められている（IAR 1984－85, pp. 62, 66）。

第2ストゥーパは第1ストゥーパよりずっとちいさい（圖10）。インド考古局の年次報告は，二つの同心圓壁（それぞれ外徑1.445 mと3.70 m）と8本の輻壁をもつ小規模のストゥーパだというだけである（IAR 1985－86 B, p. 69）。しかし附屬の寫眞でみると，ストゥーパ全

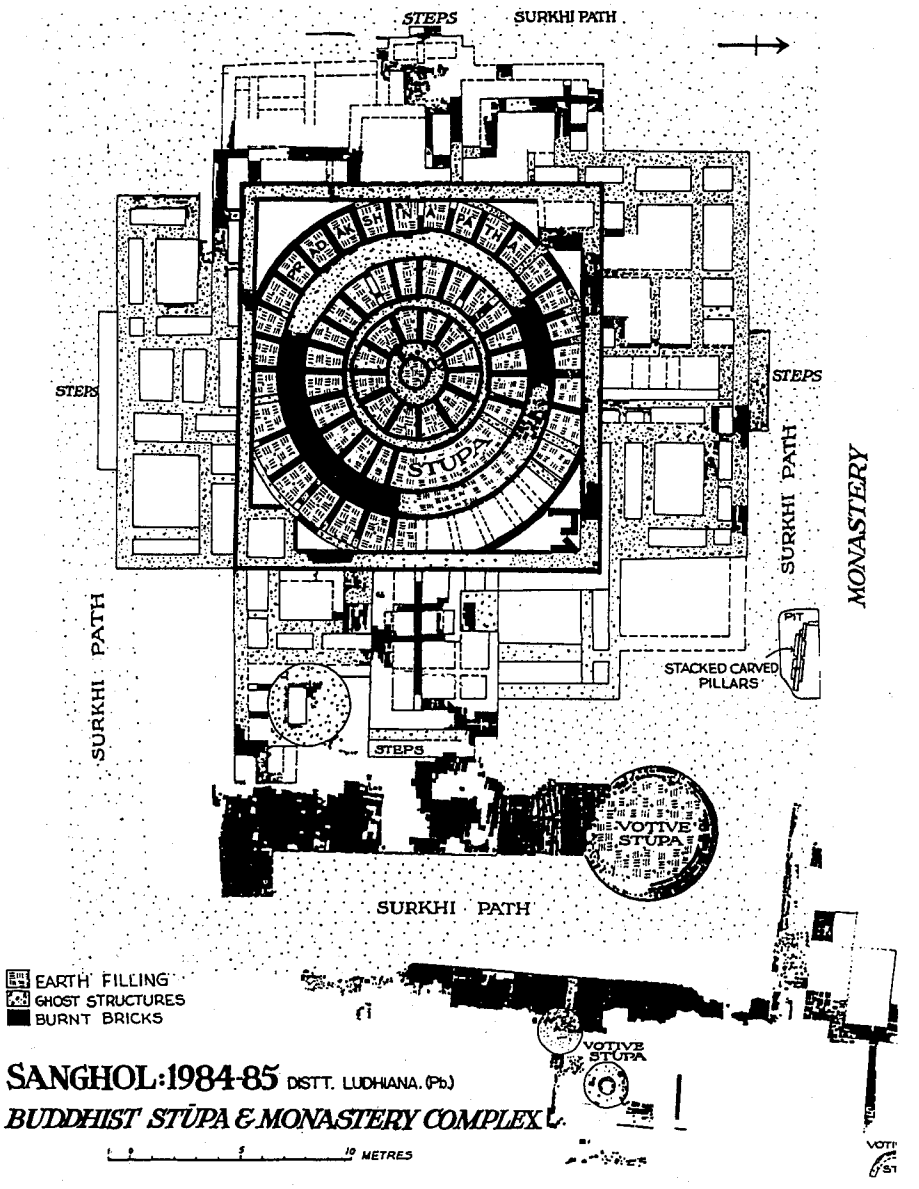

圖8　Sanghol第1ストゥーパ區平面圖

圖9　Sanghol 第1ストゥーパ南西部の遺構

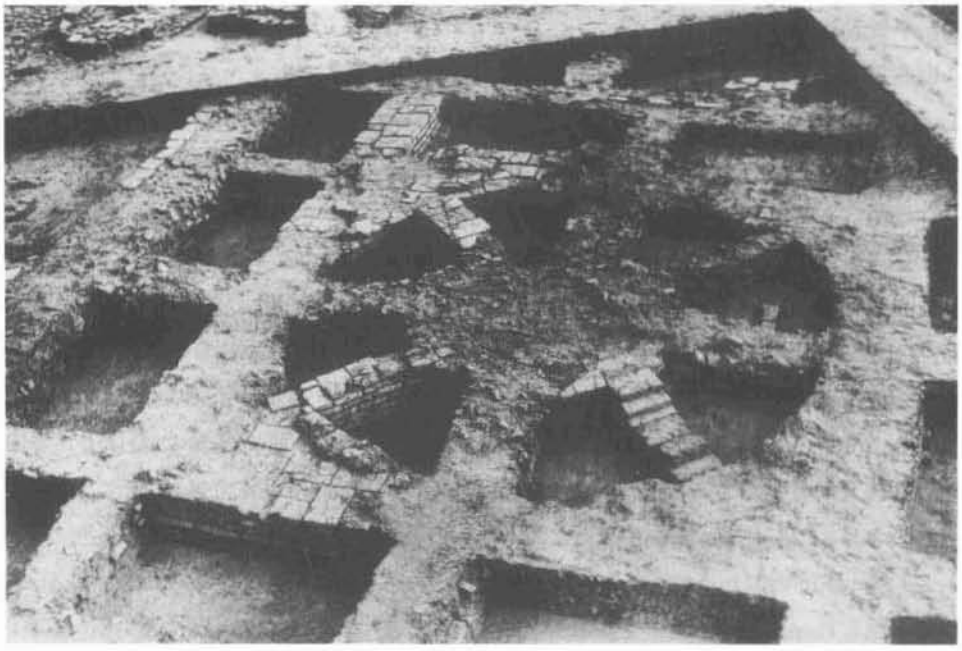

圖10　Sanghol 第2ストゥーパ

體は方形で，方形の內部を圓形につくり，この圓の中心におおきな內實の轂部があり，輻壁が8本支えている恰好である。方形の各遍の外側には細い長方形がをつくる點，第1ストゥーパに似ている。しかし，ここでは各方形と車輪形とは相方が對應する形で整頓されている（IAR 1985－86 B, pl. 23)。この寫眞が發掘の最終段階で撮ったものなら，ストゥーパは方形のテラス上に建てられたといってよい。

遺構を1995年11月に直接調べる機會があった。程度の低い過度の補修が施されていて，發掘當初の姿を考えることがたいへんむずかしい。とくに第2ストゥーパは復原的補修であり，報告の寫眞と結びつけて考えることさえむずかしくしている。報告の寫眞では，圓筒部は立ち上がっていない。方形部とともにきれいに削平されている。元の圓筒の高さはわからないはずである。このストゥーパの外觀を，方形基台のうえに圓筒部が乘っていたような恰好だったとすると，方形基壇のもとの高さもわからなかったはずである。修復された遺構では，削平されたレベルからさらに煉瓦を最高6段積んで，40 cm ほどの高さにしてしまっている。そのためこの高さが方形基壇のもとの高さのような錯覺をあえる。こういった點を考慮して發掘された當時の計測値を遺構にそってかんがえると，方形の一邊はだいたい8 m（北邊は8.06 m)，中心の轂の外徑は1.5 m（轂部は內實ではなく，寫眞が撮影されたあとで中空であることが確認された。內徑は0.34 m)，輻壁の幅0.54 m，長さ0.79 m，外輪の內徑が4.63 m，方形部の殘高が0.44 m である。ストゥーパ全體から受ける印象は，華奢である。

圓形を方形のなかにおくやり方は第1ストゥーパと第2ストゥーパに共通している。Taxila の Sirkap 第Ⅱ層期の Block 1E′ のストゥーパは，內部は圓形でなく方形であるけれども，Sanghol と類似の形式である（Marshall, 1951, p. 183)。これについては後述する。年代に關わる遺物としては，(1) 多くの印章と封泥で，Brahmi文字のものが多く，Kharoshthi文字のものはすくない。(2) 片岩製錢笵。(3) Indo-Parthian, Kushan, Huna の貨幣多數。(4) Taxila 出土品と酷似した象牙製の櫛。Marshall（1951, Plate 199）は Nos. 18, 19, 21, 22, 23 の5點をあげているが，どれに當たるのかわからない。(5) もっとも重要なのは Kushan の晩期の椀形土器の內側に墨書された銘文であり，字體は2－3世紀である。

Sanghol で一括埋藏してあった欄楯部品は全部で117點の多數にのぼり，みな Mathura 派の彫刻である。欄楯を Mathura でつくって Sanghol まで運び、そこで組み立てたのである。Mathura 彫刻を大量に運んだものとしては，ここがいまのところ西の果である。Sanghol のふたつのストゥーパの外形は，方形基壇に圓筒部が乘った形である。方形基台なら Gandhara でお定まりのストゥーパの形態である。Sanghol が Mathura から Gandhara へと通じる街道上にあることがおもいだされる。Mathura の Kankali Tila は Jaina のストゥーパといわれ，ここととおなじように車輪狀の構造をもったものであり，か

つ S. P. Gupta が指摘するように，これら欄楯の柱のおおきさや作風もまたきわめて Kankali Tila 出土品に近い。それは中インドの Bhuteśvara のものより低く，彫り出しも高くないらしい。Sanghol のストゥーパ自身には年代を知る手がかりがないけれども，Kankali Tila と比較できるから，1－2 世紀といった，Kushan 時代にあてることも無理ではない。Gupta はとくに年代について章をさいていないが，Sanghol の報告册子の表紙には「1 世紀」と書いている。

Sanghol 發掘の最後の年次報告では第 2 ストゥーパと同じ地區である SLG－11 で第 3 のストゥーパが，地面まで削平された狀態で出土したことを記している。報告の寫眞からみると，すくなくともふたつの同心圓壁があり，中心の轂部からいくつかの輻壁が放射している。方格のなかに圓筒が入れこになった型式ではない（IAR 1989－90, pp. 91, 93, pl. xxvii, b)。

(11) *Tahkal Bala*（圖 11）

前世紀に A. Cunningham と同世代の P. Haslett は Tahkal 遺跡を發掘し，Foucher はその報告（Haslett, 1876, pp. 238－9）に據って車輪狀構造を說明した（Foucher, 1905, p. 88)。Errington は潰滅狀態の遺跡を近年現地に探索し，あわせて Haslett 報告を再檢討してこの遺跡にあらたな光をあてている（Errington, 1987, pp. 320－23)。

Haslett によれば，Tahkal Bala にはふたつのストゥーパがあり，A 地區の MoundA がつぎのような構造をもったストゥーパであった。車輪狀構造といっても同心の環狀壁ではなく，正十六稜壁である。どちらも全體の構造を堅固にするための壁で，壁からは石が突出し地面にアリボソのように咬みこんでいる。壁間は石で充填している。內側の稜壁で圍まれた空間は，中心から外へむかってさし渡すように十字形に壁を築き，壁間は泥土と丸石で水平層狀に詰めこみ，十字形の壁と丸石層ははっきりと區別できる。マウンドを掘りさげると，蹴込みと段幅がともに 20 cm の階段狀につくった壁をひとつみつけた。これが一體なんなのかはっきりしないが，ストゥーパの外輪壁ではなさそうである。とすると，外輪壁はその一部たりとも發見できなかったのである。以上を Errington は，Haslett の報告によって，直徑 105 ft（31.5 m）のストゥーパの內部を記錄したものと解釋している (Errington, 1987, pp. 314, 321)。

Mound A の平面圖 (Haslett Sketch no. 3 ; Errington, 1987, pp. 308－9, fig. 4）には中心を共有するふたつの十六角形が載っているが，壁の厚さや輻壁のありさまは描いてない。Haslett の記述や Errington の解釋によると，轂部としての構造は存在しなかったようである。Fil Khana, Shah-ji-ki Dheri, Kankali Tila とおなじである。平面が八角形のストゥーパはちょっと考えただけでも Takht-e Bahi, Hadda の Tapa-e Kalan, Kapisa の

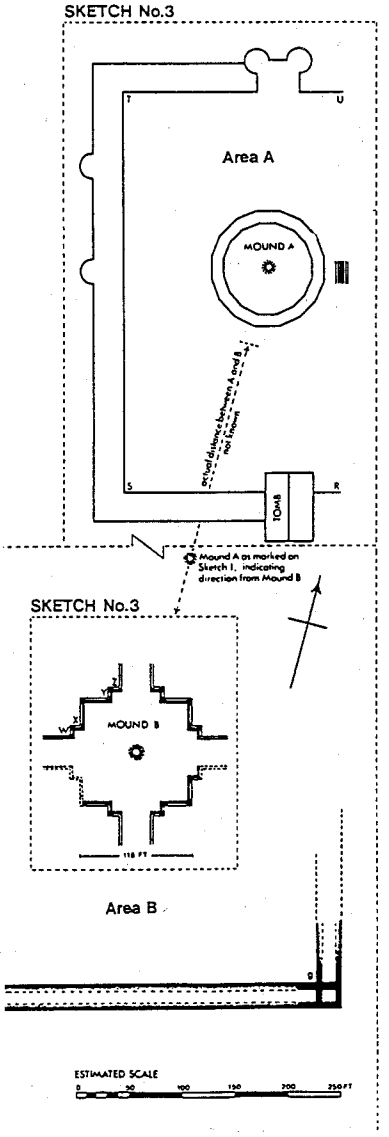

圖 11　Tahkal Bala のストゥーパ平面圖

Shotorak (Kuwayama, 1991, p. 103 ff., fig. 10), Ghazni の Tapa Sardar (Kuwayama, 1991, p. 95 ff., fig. 7) にあり，みな小ストゥーパばかりで，年代もそんなに古くは見積もれず，せいぜい早くて 7 世紀である。十六角形の大ストゥーパなど，このあたりの歴史の文脈では聞いたことがない。だから，十六角形の壁は内部の構造壁であって，外側に本當の外輪壁があったのかもしれない。可能性は否定できない。ただ十六角形の差し渡しでも 32 m に近い，規模の大きいストゥーパとなると，56 m と 72 m の間にある Shah-ji-kiDheri の第 1 期の圓形ストゥーパ (Kuwayama, 1997, pp. 20－26)，34.5 m の Taxila の Dharmarajika の Main Stupa, 33.3 m の Ghantaśala, 41.4 m の Amaravati に比肩される。

Tahkal のストゥーパは長方形の壁に圍まれている。圓形や半圓形の稜堡が圍壁についているが，ストゥーパと圍壁とが同時期かどうか，それを檢證する手がかりが Haslett の報告のなかには與えられていない。Hadda の Bagh Gai (Barthoux, 1933, p. 144) は，塔院と僧院とが僧坊の壁ひとつを隔てて南北につながった，長方形の建物である。圓形ないし半圓形稜堡はこの建物の四隅と僧院の入口にひとつついている。Kapisa の Shotorak ではもっとも新しい時期に改築された塔院の東端についたもの，僧坊とおもわれる地區の南外緣についたものがある (Kuwayama, 1991, pp. 103－7, fig. 10)。Gul Dara の方形の僧坊も圓形稜堡でまもられている (Kuwayama, 1991, fig. 9)。Tepe Maranjan 寺院跡でも方形の建物があらたにすくなくとも 3 つ圓形稜堡をつけて第Ⅲ期にあらわれる (Kuwayama, 1991, pp. 100－3, fig. 8.)。Shah-ji-ki Dheri でも第Ⅲ期に圍壁が認められ，半圓形稜堡がついている。Taxila の Sirsukh は市壁に半圓形稜堡がついているが，以上の例とは形式が異なっている。Taxila の圓形稜堡の年代については異論がおおいが (Schlumberger/Le Berre,

1964, p. 88, n. 6 ; Fussman, 1974, pp. 91－2)，これを除くとほかの例はみなだいたい時代のさがったものであり，年代は7－8世紀である。大體八角形のストゥーパといった型式があたらしいものであることからみると，十六角形もそれほど古くさかのぼるものではない。ストゥーパの圍壁に附いた稜堡の年代を上の諸例を參考にしてかんがえてみると，Tahkal Bala は1，2世紀などのストゥーパではなく，ずっとあたらしい可能性がある。

(12) *Dharmarajika*（圖12）

Dharmarajika の車輪狀構造は輻壁が大きな轂壁に集まるだけの型式であり，外輪壁がない。またここでは基礎に置かれたのではなく，圓形基壇のうえに築かれている。圓筒部から伏鉢にいたる，ストゥーパ上部の內部構造である。Marshall によれば輻壁は rough rubble masonry（粗い亂石積）で，もと16本からなり，それぞれの幅は一定でなく，95－143 cm を測る。「これらの構造壁は，ストゥーパの基礎の方へ下がっていかず，基壇上面（berm）よりちょっと上で止まっているから，ストゥーパがいちど荒廢したあとでおこなわれた，後代の修復であることはあきらかである」(Marshall, 1912－13, p. 10)。

Marshall の記述と平面圖によれば，ストゥーパの轂部は內實の圓胴形であり，石積法は輻壁とおなじ粗い亂石積である。直徑は15 m。ストゥーパの直徑は基壇部が約39 m，その上にのった胴部が34.5m であるから，これらにくらべてもそれはあまりにもおおきく，類例がない轂壁である。輻壁で殘っているのは13本。北側の6本は中心から規則的に放出するが，そのほかは轂壁から反時計廻りで渦卷き狀に出ていて，全體に不規則にみえる。伏鉢を充分含みうるストゥーパの高い位置にこのような構造が施されることは，いまのべた輻壁や轂壁のありかたをさしひいても，なお南インドの Andhra 地方の例のなかにはみいだすことができない，かわった車輪狀構造である。

(13) *Sirkap* の *Block 1E′*（圖13）

タキシラの Sirkap の第II層時代の市街に大路にそってつくられたストゥーパである (Marshall, 1951, p. 183, pl. 24)。このストゥーパについては，東西10.8 m，南北12 m の方形で，丈の高い基壇がのこっているだけである。壁面の石積みは一部が古い時代からずっとつかわれていた亂石積み（rubble masonry）で，大部分が diaper 積み（後述）である。內部は各邊の中心をむすんで菱形に壁をつくり，その中をまた十字に壁でしきり，8本の壁の間は碎石と土泥でかためている。この基壇は圓形ではなく，方形であり，內部も方形につくっているが，構造上は Sanghol no. 2 のストゥーパの基壇と同じである。Marshall は Dharmarajika の車輪狀構造と比較できるものとして，Sirkap の Block 1C′ のストゥーパの基礎構造をあげているが，Block 1C′ にストゥーパはないので，このストゥーパのあ

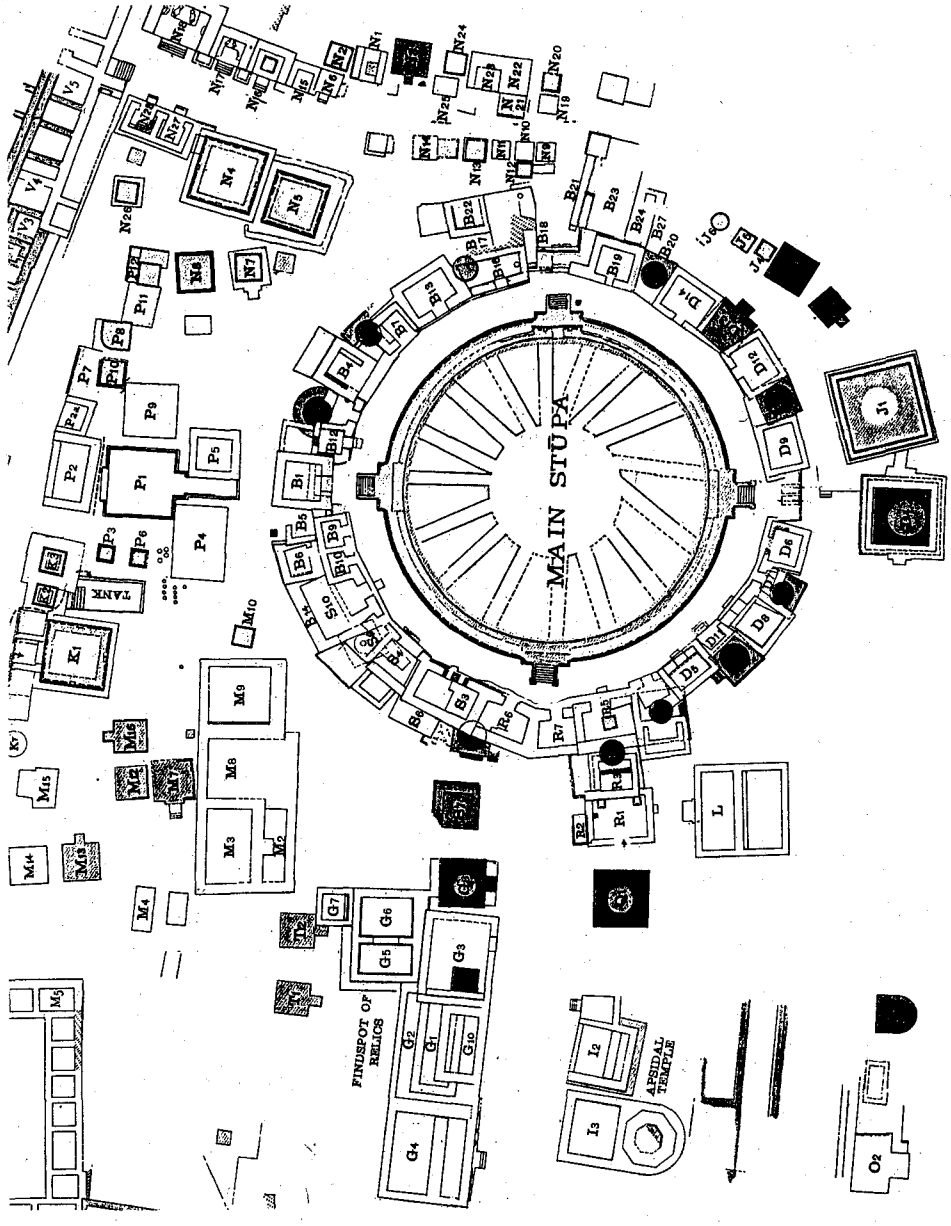

圖 12　Dharmarajika 大塔とその周圍の建築群

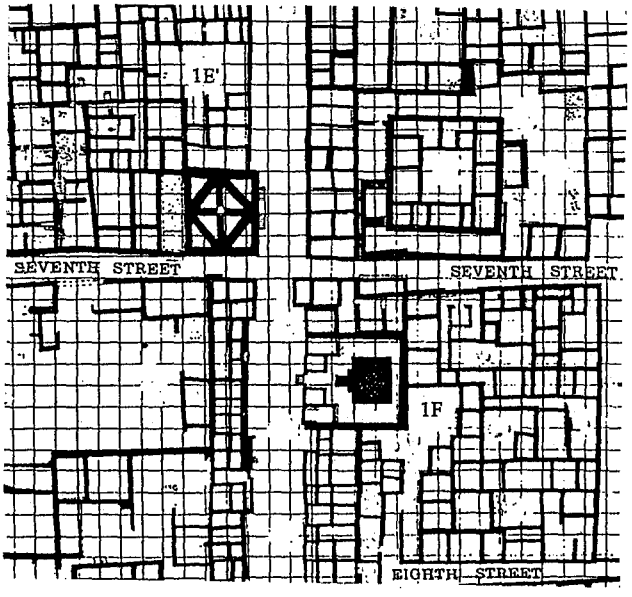

圖13　Sirkap の Block 1E′ と 1F にあるストゥーパ

やまりであろう。

(14)　*Shah-ji-ki Dheri*（圖14）

Shah-ji-ki Dheri の主塔は，はじめ圓形，つぎに方形，最後に十字形となり，3時期にわたって外觀をおおきく變えつつ展開した（桑山，1995, pp. 408－331；Kuwayama, 1997）。車輪狀構造がつかわれたのは最初の圓形ストゥーパで，Kanishka I 世以前である。なんどもおなじことを繰り返したくないが，車輪狀構造に關してはしかたがないので，以下にふれておく。

Spooner や Hargreaves の平面圖だけから判斷すると，4本は輻壁が殘っていた。どれも完全なものはなく，いちどは毀されたことを示している。中心から北西と西に出る隣り合ったふたつの輻壁がある。これは中心部だけが殘っている。もうひとつは南東へのびるものと南西へのびるものであるが，前者は中心部が損壞していて，途中だけが少々殘っているにすぎず，後者はほとんどがなくなっていて，ストゥーパの周緣に至るところで若干殘っているにすぎない。

遺跡の中心にひらいた 7.2 m 平方の試掘坑では，地表から 30－60 cm のところで分厚い輻壁の遺構があらわれた（Spooner, 1908－9, pp. 48－9）。「この壁を避けつつ掘りさげ，ストゥーパ周圍の煉瓦敷きの床面より 60 cm ほど下のレベルで，舍利室がみつかった。その位置は中心から外れ，輻壁のうちで，東へ走る輻壁の端にもたせてつくられていた。」しか

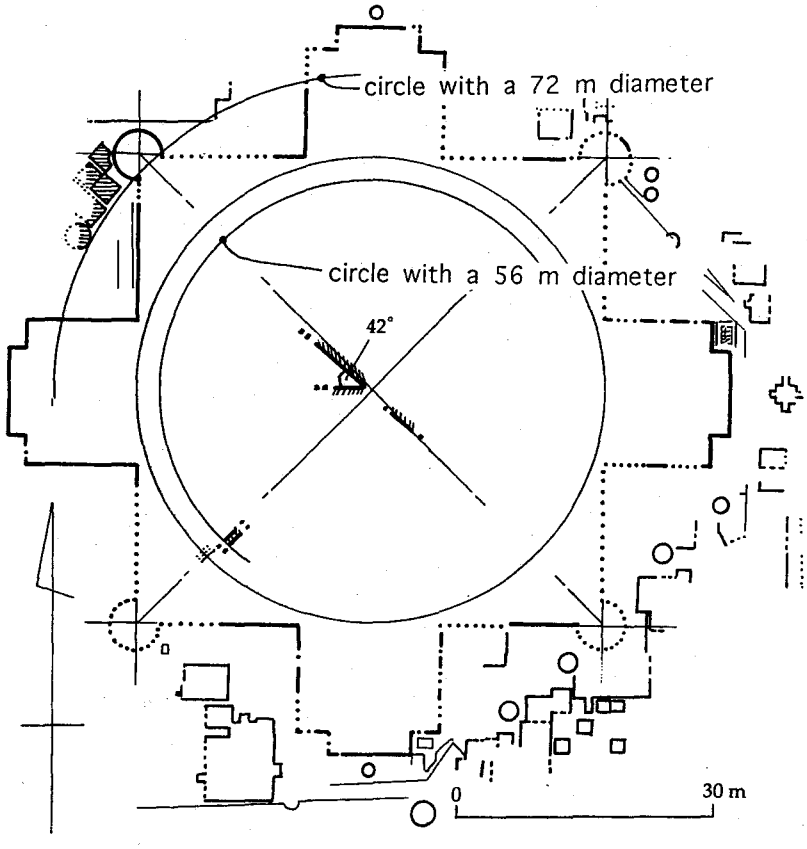

圖 14　Shah-ji-ki Dheri 大塔平面圖

し東へ走る輻壁は平面圖には描かれていない。この記述からすると，發掘當時は在ったにちがいない。

平面圖になく，記述だけからわかる，もうひとつの輻壁は，舍利室とかかわってでてくる。Spooner は舍利室を掘り當てたときをつぎのように書いている。「數日掘ってから處女層らしきものに達し，そこをあれこれ調べて，埋納物發見の望みはないとおもっていた矢先，なんの前觸れもなしに急にその遺構に出くわした」と。この記述から，舍利室は「處女層らしきもの」の上にあった。

「南北方向に一枚の長く平らなスレートの板石が敷かれていた。その南邊には重たい板石が一枚置かれ，これと直角にもう一枚重い板石が西邊に置かれていた。これら二枚はひとつの方形の 2 邊であり，その南西隅を形成していた。しかし，東側と北側に相應する板石についてはなにも發見できなかった。」これら全體がおかれている狀況からして，舍利室の北側と東側は板石で圍わず，東へ走る輻壁と北東へ走る輻壁のがっちりした石組みが

板石の代りをしていたと，發掘者はかんがえた。ここに，北東へ走る輻壁が登場するのであるが，ほんとうに殘っていたのか，Spooner の單なる想像なのか，報告の記述はあいまいである。

Spooner の記述は，舍利室の發見地點に關して，非常に多くの疑問を生む。第一に，舍利室の東の壁となっていたという「東に走る輻壁」である。7 m 平方のトレンチの中に出土した輻壁のうち，北西と西へ走るものが描けて，東への壁だけ描けない，というのは理解しがたい。第二に，東と北東へ走るふたつの隣り合う輻壁が，方形室の北壁と東壁をつくるとする點である。これはまったく理解できない。第三に，のちに Hargreaves がストゥーパの圓胴部の周緣を確かめるために，北西に走る輻壁を追いかけたが，そのときの記述として，この壁を「舍利容器が發見された場所から走る」としている點である (Hargreaves, 1910－11, p. 25)。「東に走る輻壁にもたせかけて造られていた」舍利室から，もうひとつ北西に輻壁が走っていたことになり，なんだかさっぱりわからない。舍利容器の發見地點の特定はむずかしい。しかし，かれらの記述から判斷すると，輻壁の數だけは 8 本であったろう。このことについては下の概要に述べるとおりである。

(1) 圓形ストゥーパの最大限のおおきさは，北西部の小ストゥーパ群の內側に沿った圓弧によって復原しうる圓よりかなり小さい。この圓の直徑は 72 m である。小ストゥーパ列の內側に，ある程度の幅の繞道の存在を想定すると，この形のストゥーパは直徑 70 m はこえなかったであろう。もうひとつ直徑を予想させる手がかりは南西部の斷裂した放射壁の末端，南西放射壁の殘存部分の外側の端は，現在殘るすべての放射壁のもっとも外側である。この末端を通り，放射壁の轂にあたる中心をだいたい定めて圓を描くと，直徑は 56 m ほどになる。圓形主塔基部の直徑は 56 m より大きく，70 m より小さく，南アジア亞大陸中，最大規模のストゥーパであったことになる。

(2) 輻壁は地山上に建設された堅固な石積みで，平面圖だけみると，北西，西，南西，南東へ向かう 4 本があるが，Spooner と Hargreaves の記述を讀むと，さらに北東と東とへのびる 2 本がこれに加わるから，6 本の放射壁が實際に發掘であらわれたと考えてよい。しかし Spooner や Hargreaves がつかった「北東」「東」「南西」「西」「北西」という方向指示語から推測すると，北，南，南西に向かう 3 本ももとはあったであろう。全部で 8 本の放射線を等角度で描くと，45 度でそれぞれ開く。北西へ走る輻壁と西へ走る輻壁がつくる角度は，平面圖において計測すると 42 度くらいである。8 本の輻壁は確實にあった。

輻壁の正確な殘高は不明である。舍利室を寄せかけてつくっていた放射壁はすくな

くとも 2 m はあった（桑山，1995, p. 399）。Sanghol の放射壁の殘存狀態をみると，部分的にきわめて高く殘っているものもあれば，ずいぶん下までなくなっているものもあり，その殘高は一定していない。壁の幅（厚み）も報告されていない。しかし南西の輻壁の幅を圖上で計測するとだいたい 1.2 m ほどである。

(3) 轂部：北西と西とに走る輻壁が隣りあって平面圖に描かれている。隣りあう壁のありかたをみると，轂構造はありえない。

(4) 外輪壁：確認できていない。基礎に車輪構造をおいたのであるから外輪壁はあったはずである。

(15) *Fil Khana*（圖 15）

車輪狀構造をもったストゥーパとして，あまり注目されていないのがこの Fil Khana ストゥーパで，Jalalabad から北西へ數キロ，東流する Kabul 河の左岸，礫岩台地の上に建っている。マウンドがふたつあり，どちらも倒壞したストゥーパである。河の方を向いた崖に掘り出された石窟寺院と關わるものであろう。ひとつは既に單なる石の堆積，もうひとつは 1962 年に調査したときには車輪狀構造が觀察できる狀態にあり，Simpson のスケッチでは圓胴部の上部に尖頭アーチの列龕帶が殘っていた。ストゥッコで塗裝した擬コリント式壁柱といわゆるインド式壁柱があったらしい（Mizuno ed., 1967, p. 76）。

18 m の直徑をもつ低い基台に支えられた，直徑 15 m の圓胴部がある。これら全體は 13 m の殘高で，上下ふたつの長方形基壇の上にある。上の基壇は高さがずっとおおきい。北が正面らしく，長方形基壇には階段が突出してつけられていて，圓胴部へと登っている。問題の車輪狀構造は，圓胴部の內部構造であり，輻壁が規則的に中心にむかって收斂し，轂部はない。Shah-ji-ki Dheri や Kankali Tila とおなじである。輻壁は河原石を土泥でつなげた造り。このストゥーパの正確な年代ははっきりしないが，長方形の基壇は Azes II-Kujula Kadphises 時代よりはあとである。まず Azes II-Kujula Kadphises 時代である Sirkap の第 II 層時代の市街に方形の基壇がはじめてあらわ

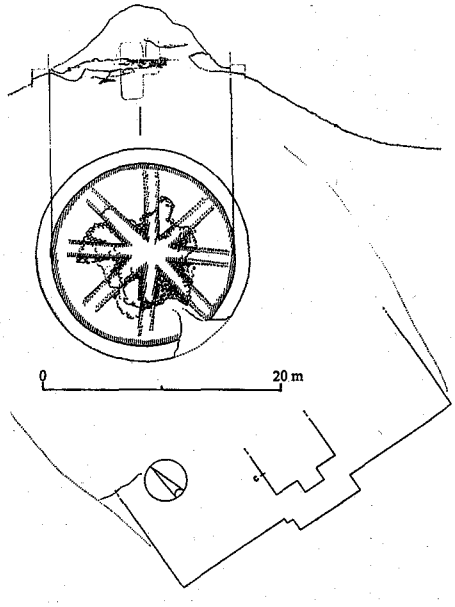

圖 15 Fil Khana ストゥーパ平面，見通し圖

れる。長方形基壇の出現はこれよりもずっと後になる。

2．法輪説批判

車輪狀構造を「法輪」にむすびつけるひとはとても多い。G. B. Sharma や S. P. Gupta (1985, p. 50) しかり，Snodgrass (1988, pp. 78 ff.) や Kottkamp (1992, pp. 73－78) もシンボリズムで解こうとする。車輪構造をそなえたガンダーラの遺構はみな時期がくだり，建築にそのような見える形で法輪を表現し，象徴的宗教的意義を具體的にしめした，というのは Faccenna (1980, p. 29, n. 1) である。Sarkar は實際上の構造として意味があることをはじめて考慮にいれたが，シンボリズム説を捨ててはいない。Sarkar (1960, p. 78) は，構造の安定と用材の節約という 2 點を動機として Nagarjunakonda の大ストゥーパに車輪狀構造が採用されたとする一方，堅固さも煉瓦の節約もたいして關係のない小ストゥーパに車輪狀構造がある場合は法輪だとしているのである。車輪狀構造をストゥーパ建築史上發達した段階のものととらえ，この段階に至って法輪とストゥーパとのむすびつきが意識され，車輪形式が採用されたとする。車輪構造のストゥーパは古くからの築造法の改良であったばかりか，象徴的な意味を建築の中にうまく移しこんだ發展形態であったという。つまり車輪は佛教のダルマをあらわし，その形をとった建築法には，思想建築構造兩面の意味があるというわけである (Huntington, 1985, p. 179)。

ストゥーパの基礎部に輻壁を配置するのであるから，それは單に大規模に煉瓦を積むことを避ける工法にすぎないといったのは V. A. Smith (1969, pl. Ⅲ) である。法輪説ばかりが唱えられるとき，こういった見方はおもしろいが，これでは車輪の形を説明していない。ここでおもいかえされるのは從來の法輪説の見方はいかにも單純だということである。その見方の誤りの最たる點は，車輪狀構造のデザインを上ばっかりからみて二次元でしか評價していないことである。ちょっとでも横からみればこの構造の縱位置をまったく無視することはできないはずである。

北西インドの例について上にみたところをおもいだせば，もっとよく理解できよう。Dharmarajika の車輪構造は圓胴部から伏鉢にかかる部分の中味である。だからその位置は甚だ高所にあり，そんなところで法輪を示したものとはおもえない。しかも伏鉢なら半球形であるから，法輪とは相容れない。轂と輻と輪のうちでどれひとつ欠けても車輪にならないのに Dharmarajika (圖 12) や Fil Khana (圖 15) では外輪がない。それでは法輪を示しているとはいえない。Fil Khana や Kankali Tila (圖 7) では轂がない。Kankali Tila では輪壁がふたつある。Tahkal は年代の上でこれらとは隔絶するかもしれないが，ここも輪壁様のものがふたつある。これらは法輪とはおもえない。輪が二重の法輪は存在しな

いどころか，そんな車輪は實際にはありえない。Shah-ji-ki Dheri（圖14）では輻もなく，外輪もないかもしれない。法輪とはほど遠い。

それなら南の例ではどうか。基礎部に限定して置かれ，それに高さという要素が加味されるのであるから，これは法輪などというものでは決してない。平面，水平面だけみるなら，たしかに車輪形である。しかし車輪狀構造では横位置縱位置をともに考慮にいれる必要がある。そうするとそれは圓筒形である。圓筒形は轉がせば廻るけれども車輪にはならない。ここでは轂のない例はごく小さいストゥーパにみられるだけだが，Ghantaśala（圖2）や Nagarjunakonda（Stupas Nos. 3, 9）（圖6）では轂が方形であり，車輪とはいえない。南では一方，大規模なストゥーパでは外輪壁のほかに轂と外輪壁との間にいくつかの同心圓壁をおく例が比較的おおい。これは北の Kankali Tila や Sanghol 第1ストゥーパ（圖8）あるいは Tahkal Bala とおなじ趣向であり，車輪の輪ののなかにいくつも輪をいれた車輪など車輪とはいえず，法輪を示したとは到底いえない。

これでもまだ法輪の可能性に固執するひとのためには彫刻に描き出された法輪とストゥーパの車輪狀構造とをくらべればよい。いくつかの根本的な違いが浮かぶ。第一に，法輪の場合，轂は平面圓形に表現されるが，單なる圓形ではなく，實際の車輪の轂を描寫している。ところが車輪狀構造では，圓形あり，方形あり，それを欠いたものもあり，多樣であって，これでは法輪とばかりいっていられない。

第二に，前述と重複するが，描寫された法輪では二重，三重の同心圓輪は絕對に存在しない。これは法輪といえど，空想で描いたのではなく，實際の車輪をそっくり寫したからだ。車輪狀構造の場合は二重，三重の同心の環狀壁が多くの例でみうけられる。車輪のように一見みえるけれども，實は車輪とは何にも關係ないのが，車輪狀構造なのである。

第三には，法輪を描寫する場合，輻の數には制約がないといってよい。多くてもいいし，すくなくてもいい。これこれの數をどうしてもあらわさねばならないといった定則がない。表2には手元の例で數えた輻の本數を示しておいた。あまり意味はないとおもうが，ちょっとした傾向が各地に認められるのは興味深い。まず Sanchi 第一塔の塔門の浮き彫りをみると（圖16），法輪の輻の數は，16, 20, 22, 25, 26, 28, 32, 34。第二塔では12本と16本，第三塔では17, 20, 24, 27本である。ばらつきが大きい。Amaravati のパネルに描かれた法輪には無數の輻が細密に描寫される。これにはいつもぐるぐる廻っている法輪といった考えが，千輻輪として表現されているのかもしれないし，あるいは單に Amaravati 彫刻に共通する特徵的な細密な表現法のせいかもしれない。いずれにしても，輻が數えられる場合，その數は，28, 31, 63, 64, 81本と多い。圖17は佛足の法輪の例である。

これらに較べてガンダーラでは輻の數はすくない（圖18）。少ないのは，一般にガンダーラ彫刻の石質に原因があって Amaravati のようには表現できなかったのかもしれない

し，法輪が表現される浮き彫り部分の廣さ，大きさにもよるかもしれない。どっちにしてもおもしろいのは，佛足に表現された法輪と三寶標などの法輪とでは差がはっきりとしていて，前者は少數で，4，6，7，8，9，10，11，12，13，14，15，16，18，20，24本，後者は多數で，24，35，42，57本といった傾向があることである。

法輪と車輪狀構造との輻數を比較して顯著な點は，法輪表現では奇數も認められ，輻數は一定しないという事實があるのに，車輪狀構造の場合は輻數には定則があることである。4，6，8，12，16，24，32に限られる（表1）。輻壁の數としてはこれかぎりである。それは圓周を等分するのに容易な數であり，4本の輻と6本の輻が基本になり，次第に二等分することによって數をふやすのである。4本はコムパスで直徑をつかって圓周上に4點をえ，6本の場合は同樣に半徑をつかって圓周上に6點を得る。コムパスはこの場合不可欠である。4本からは8，16，32を得，6本からは12，24を得，たやすく所用の數の輻壁がつくれる。Vitruviusは，ローマの劇場やギリシアの劇場をつくるとき，まずオルケストラの圓周をつくり，その圓に內接するいくつかの三角形や四角形を，圓周上の各頂點を等閒隔にしつつ作り，その頂點が基本となって，そこから客席への階段が放出され，次第にプランが形成されることをのべている（森田，1969, pp. 222, 223）。ここではそんなに複雜な工程をふまなくてもよいのである。建設のひろい現場で車輪狀構造をつくるとき，まず圓周を等分する必要があった。きちんと分割すればするほど構造は堅固である。要するに4と6は現場で圓周を等分することを容易にする。こういったきまった數が車輪狀構造に認められるのは，工事の現實によっているのであり，法輪なんかを造ろうとおもったのなら，分割なんかいい加減でよいのである。ついでにいうと，ArrianusがPataliputraの市門を64門としていることに注目するTucci（1971）は，帝王の住處と關連して4，8，16，32，64が聖數であることを論じ，16本の放射壁をもつDharmarajika大塔もこれに含めている。これでは12，24の場合が解けないし，Nagarjunakondaには10本の放射壁をもったストゥーパ（Stupa No. 16）もまれながら存在する（Sarkar, 1966, p. 86）。

法輪について車輪狀構造とのかかわりを考えたのであるから，ヴェーダ祭式のratha-cakra（戰車の車輪）についても言及しておく。これはAgnicāyana祭式のために建設される祭壇のひとつの形式である（圖19）。Mānava Śrauta SūtraやBaudhāyana Śulba Sūtraの二書の記事をSatyaprakash/Sharma（1968, pp. 162 ff.）とvan Gelder（1985, pp. 311 ff.）に據って要約すると，この祭壇は燒成煉瓦ばかりを5層に積んで造られる。煉瓦自身も大きさ，形，數に至るまで嚴格な規定にしたがってつくらなければならない。轂，輻，輪の位置や使う煉瓦の數など，祭壇にも適用される。これらの規定を定めた祭式書では，また，5層のうち奇數層にそれぞれ意味を與えている。第1層は「地」であり，第3層は「空」，第5層は「天」である。

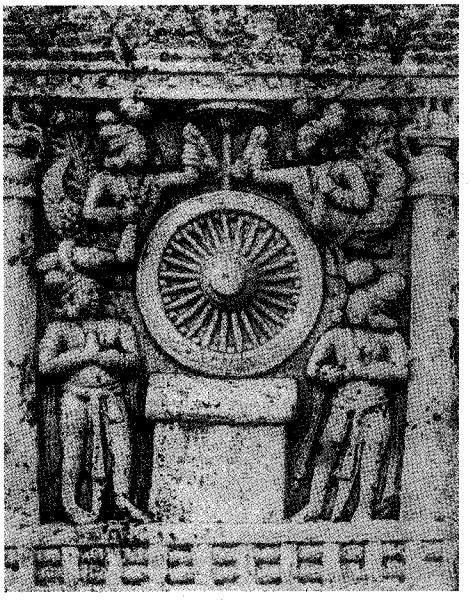

圖 16　Sanchi 第 1 ストゥーパ北門浮彫の法輪

圖 17　Amaravati 大塔出土の浮彫佛足の法輪

圖 18　Gandhara の初轉法輪圖の法輪

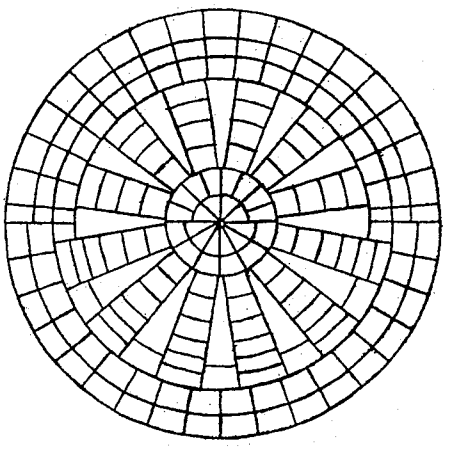

圖 19　Rathacakra 圖

車輪狀構造をもつストゥーパとのかかわりの如何を考える場合，この車輪形祭壇で特別重要なのは，祭壇が特定の儀禮に際して築造され，しかもそれっかぎりで，ふたたび利用されることなく見捨てられるということであろう。祭壇は祭式の執り行われる期間においてのみ神聖とみなされる。おわれば禮拜の對象にもならないただの煉瓦積みにすぎず，放棄され，忘れ去られる。このように，Agnicāyana 祭式の如何なる側面も，車輪狀構造のストゥーパとは無關係に相容れないようである。ヴェーダ祭式に起源するなにものも車輪狀構造のストゥーパに取り込まれていないからである。つながりがあるとすれば祭壇の車輪狀がストゥーパのものと似ているということにすぎず，その類似は佛教の法輪の場合とおなじで，意味がない。

そもそも圖象論者はストゥーパの年代を考えない。ストゥーパならどんな時代のストゥーパでもおかまいなく，その意味論に終始して編年を無視する。實は次第にあきらかになるように，車輪狀構造は時期を限って出現する。そのことにシムボリズム論者は頓着しないのである。それでよいわけがない。法輪をあらわしたものであるなら，最初期のストゥーパから車輪狀構造をなぜ使わなかったのか。なぜ時期を限ってあらわれるのか。なにを背景にその時期に法輪がストゥーパに內包されたのか。その意味はなにか。そうして，最大の問題として，なぜそれが圓筒形をしているのに法輪であるのか。これらがすべて證據をもって說明されなければ法輪說はなりたたないであろう。車輪狀構造はある特定の時期に，そうして南北の諸例であきらかなように，地域をも限って出現している。このことを念頭において出現の歷史環境を考えなければならない。

3．初期ストゥーパの構造

法輪とも關係が無く，いわんやヴェーダ祭式とも無關係であったとなると，このような，いわば特殊な車輪狀構造は，一體，なんに由來するのであろうか。それには初期のストゥーパをみなくてはならない。といってもさほどその例は多いわけではない。初期のストゥーパにこの構造を釀成する要素が隱されているかもしれないからである。

ストゥーパをはじめて造ったのが誰であったかはわからない。釋迦の骨灰をもちかえった八國の支配者たちであったかどうか，それはあくまでも傳說である。發掘の精粗をとわず，出土したストゥーパのうちで，ほとんど最初期と考えられるストゥーパには，實は車輪狀構造はないのである。それだから車輪狀構造のストゥーパをストゥーパ建築史上の發展段階のものだという Sarkar の見解もでるわけであるが，以下にその例をのべる。

Vaiśali の最初のストゥーパは第 5 層の上に泥土をかためて築成された（圖 20）（Sinha/Roy, 1969, p. 18）。ここでは全部で 7 層あり，自然層の上にのっているのが第 7 層で，やわら

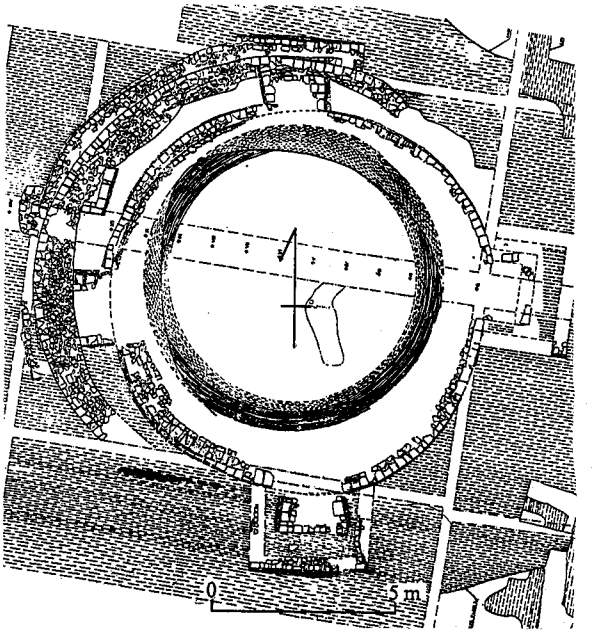

圖20　Vaiśali のストゥーパ

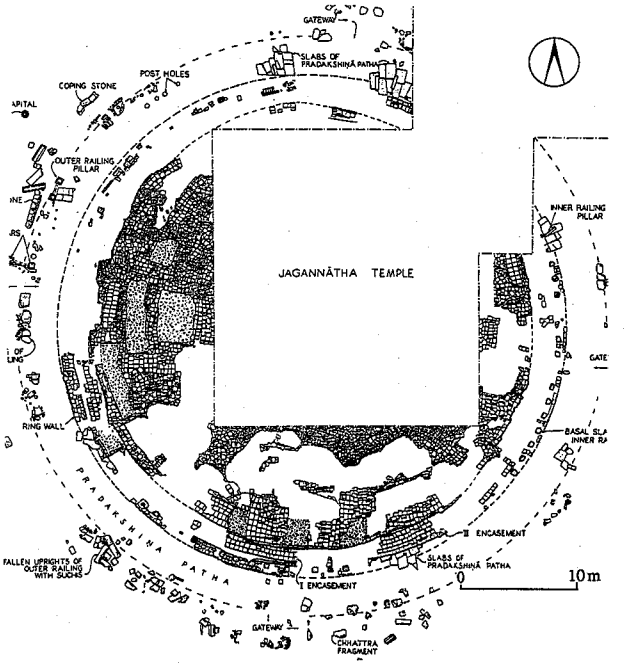

圖21　Pauni の Jagannatha Tekdi ストゥーパ

かい沖積土。第6層は黃褐色堅緻土で，NBP土器をふくむ。そのうえに薄く堆積した土層が第5層であり，遺跡の全體にひろがり，叩き締まった砂質土。NBPのほかに赤色，灰色土器があり，腐蝕した銅貨一枚があった。この土層の上面に最初のストゥーパは築かれた。復原直徑約8.16 mである。そののちストゥーパの周邊部がくずれて，その上に第4層が被さった。第4層もNBPを豐富に含む堅緻な土層である。第4層の上面において第1回の增廣が煉瓦でおこなわれ，東西南北四面にayakapathaがつくられ，ストゥーパの直徑は約11.21 mとなった。增廣はその後3回あり，最後に北西部で一部補修がなされた。この歷史のなかで第2回の增廣までがNBPと共伴するので，最初の土饅頭ストゥーパから第2回增廣までは紀元前6世紀なかごろより紀元前3世紀の中におさまる。つまり，NBPとはNorthern Black Polished Wareの略で，北方黑色磨研土器とでも譯され，ガンガー＝ヤムナー流域に紀元前6世紀から4世紀にかけて流行した土器樣式であり，type-fossilとなっている。このような古い時代のストゥーパにおいては車輪狀構造はみあたらないし，全部土を突きかためてつくった低平なストゥーパである。

つぎにMaharashtraのPauniのJagannatha Tekdiストゥーパ（Deo/Joshi, 1972）は，最初期のストゥーパの周圍の繞道を覆う土層からNBP土器やBR土器が出土しているから，Vaiśaliのストゥーパとあい前後するストゥーパである（圖21）。最初のストゥーパの伏鉢が，ひとつのトレンチであきらかになった。その土層の斷面によれば，構造としては，褐色の土泥をつなぎにして16層に煉瓦を積む。煉瓦の大きさは40 × 37 × 10（cm）である。これを平面でみると，ストゥーパの圓形を方格にしきり，それぞれの方格の中を大型の燒成煉瓦を土泥でかためながら水平にならべ，次第に高く重ね積んでいる。當初のストゥーパの直徑は38.2 mであって，相當に大規模，莊重なものであるが，煉瓦の積み具合はさようのものであって，車輪狀構造とは程遠く，またここから車輪狀構造がかんがえだされたとも想えない。車輪狀構造が煉瓦生產の經濟效率を圖ってあらわれた，とする見解は，このようなストゥーパからかんがえだされたものなのであろう。

初期のストゥーパについてこれらとは異なった築造法もしられる。それはAndhraのBhattiproluのストゥーパである（圖22）。出土した3個の舍利容器の銘文字體は，紀元前200年ないしは若干古いとするひと（Bühler, 1894, pp. 323－329），さらに百年さげるひともいて（Sircar, 1965, pp. 224 and 225, n. 5），定まらないが，どちらにせよ紀元前2世紀をくだらないのであろう。Rea（1894）やそれ以前の報告（Burgess, 1874, p. 124）によれば，發掘時の殘高はわずか4.2mであるが，伏鉢は基部の直徑40.26 m，その下の圓形基壇の直徑が45.14 m，基壇の上面の繞道は幅2.44 mという，すさまじい規模であり，ガンダーラのShah-ji-ki Dheriを除くと，面積ではインド亞大陸中古今最大である。全體のつくりは，煉瓦を內實に，一層の厚みを15 cmとして規則的に排列して積みあげたもので，Pauniな

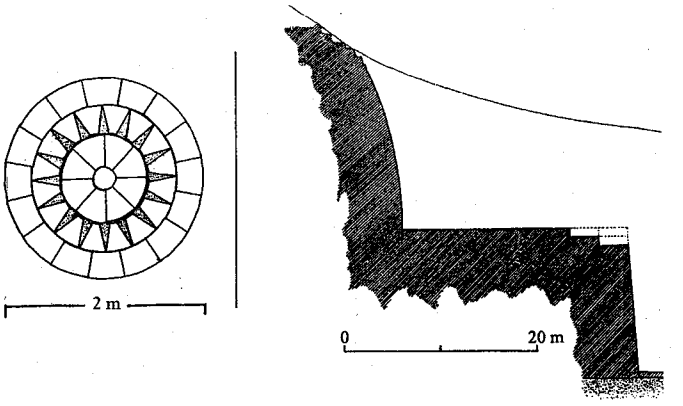

圖 22　Bhattiprolu のストゥーパ

どとにているといえば似ている。しかしここでは伏鉢の中心に，約 2 m の直徑をもつ圓筒が頂上から下まで貫いている。この煉瓦構造は，中心は直徑 22.5 cm の中空とし，同サイズの 8 個の煉瓦がそれを圍む。その外には 16 個の楔狀の煉瓦を中心へ向かうようにならべている。そうすると煉瓦間に三角のすき間があくから，そこを土で充填する。そうしてさらにこの外側に 16 個の煉瓦を同心圓狀にならべる。この圓筒狀煉瓦構造が中軸まわりだけに限られていたことは，その直徑が 2 m，伏鉢基部の直徑が 40 m 以上あることからすぐ承知できる。とすると，これは車輪狀構造とはまったく別ものということになる。

似たような構造が Piprahwa で Peppé が掘ったストゥーパでもみられた。マウンドの頂上に 3 ×2.4 (m) のトレンチを掘ったところ，煉瓦と煉瓦を土でかためながら何層にも重ね，同心圓狀にならべる構造があったという。煉瓦の大きさは 40 × 27 × 8 (cm) と 38 × 25 × 8 (cm) の 2 種であった (Peppé, 1898, pp. 573)。

「Dharmarajika や Butkara の主塔建築は伏鉢の中心から壁が放射している。そのような建築技術は，Shah Dheri の Shapur Tope (Foucher, 1905, p. 87) あるいは Kankali Tila のジャイナストゥーパ (Smith, 1969, p. 4) などのもっとも古い時代の建築技法と同じである」。かく認めるのは Fabrègue (1987, p. 34) である。これはいかにもおかしな認識である。Foucher が掲載する寫眞の Shah Dheri の Shapur Tope とは Marshall の呼稱では Dharmarjika であるし，Dharmarajika と Kankali Tila とは，車輪狀構造といっても全然異なっていること，前述のとおりである。ここでわざわざ Fabrègue をとりあげるのは，けちをつけるためではない。ガンダーラ佛教美術の起源を論じるその出發點に，このような車輪狀構造の理解があるのを問題にしたいのである。Butkara 大塔の中心から放射していると彼女がいう壁は問題である (圖 23)。Butkara のストゥーパは，つくるときに最初の核となる半球形を片岩で積んだ。この內核の根元まわりから，細かい石で敷石をつく

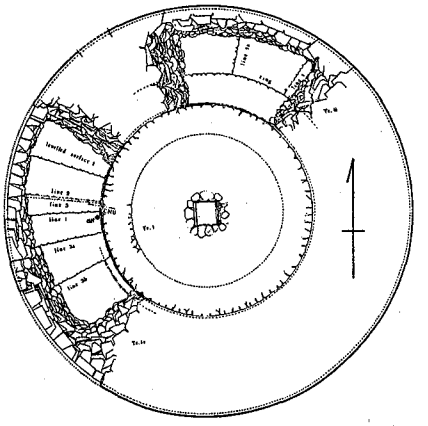

圖23　Butkara Ⅰの大塔初期の平面

り，一定の範圍までくると段落をつくる。その段落の上にかぶさるようにふたたび敷石を重ねていく。この作業を內核のまわりに螺旋狀につみかさねていくと段落は內核を中心にしてそこから放射しているようにみえるのである。Faccenna は，平面形はストゥーパの車輪狀構造を想い出させるが，造り方としては輻壁とは全然違うといっている（Faccenna, 1980, p. 29, n. 1）。はっきりと車輪狀構造との違いをのべているのである。つまり Butkara のつくりは，Bhattiproli や Piprahwa と同じ範疇にはいるともいえる。圖面だけみて本文を讀まなかった粗忽な誤解であり，Butkara には車輪狀構造はないのである。

このようにみてくると，Sarkar がのべるように，車輪狀構造をもつストゥーパはストゥーパ建築としては一段と進んだ段階にあるようにみえる。しかしもし本當にそうなら，さきほどみた古い段階のストゥーパ，Vaiśali とか Pauni などから次第にそれが展開して車輪狀構造をもつに至る過程の證據があってもよさそうだが，そんな段階のストゥーパは，以上のとおりであって，見つかったためしがない。Bhattiprolu, Piprahwa, Butkara などの最初期のストゥーパにおいて車輪狀構造のようにみえたものは，ストゥーパの中軸部だけに關する局地的な構造というほかなく，車輪狀構造とは無關係である。

4．車輪狀構造の地方差とその意味

初期ストゥーパとのかかわりもない車輪狀構造はなぜそのような形をもってストゥーパに採用されることになったのか。それをはっきりさせる手がかりは，車輪狀構造の地域差とそれぞれにおける特徵に求められる。みな南アジア亞大陸內に限定されることはよいとしても，亞大陸のどこにでもあるというわけではない。地域に偏在集中している。もっとも濃いのは南東地方，Andhra Pradesh で，Coromandel 海岸の北端，Krishna や Godavari の下流域である。つぎが北西地方で，古代の Gandhara, いまのアフガニスタン東部の Jalalabad から Peshawar をへてインダスをわたり，Taxila に至る一帶である。このふたつの地方が目だっている。ほかに Mathura とか Chandigarh のようなところにもあり，南東地方と北西地方とをむすべば，これは中間に入る場所である。各地域における車輪狀構造の共通點はふたつしかない。輻壁があるという當たり前な事實と，中心の轂部の

有無とは無關係に，車輪狀構造が本質的に野外の大規模なストゥーパに使われた，という點である。南北の車輪狀構造は違いの方がおおきい。このちがいこそ車輪狀構造の出自を物語る（圖1）。

まず南東インドであるが，ここではどの例もみな基礎に車輪狀構造を置き，外輪壁は極端に幅がひろく分厚く，中心には，圓形あるいは方形の轂部がかならず設けられ，いかにも車輪を模したようにつくられる。分厚い外輪壁はここではきわめて特徴的である。分厚い外輪壁の內部には，おおくの場合，同心の環狀壁がおかれ，輻壁が放射されて同心環狀壁をがっちり固めている。さらに南東の諸例で一般的に採用された，中心の轂部は，煉瓦を積んで造った圓形ないしは枡形の設備であり，ほとんどの例が煉瓦をびっしり內實に積み，若干の例では圓筒形，ないし方形の筒形となっている。Nagarjunakonda でいちばん小さなストゥーパを除けば，このことはストゥーパの規模とは無關係にみとめられる。こういった轂は，そこから放射する輻壁と環狀壁を支え，外輪壁の內部を堅固にする。Ter のストゥーパについてもいえる。Ter のストゥーパは南東インド型である。

こういった南東インドの諸例からみると，北西地方の車輪狀構造は異常である。輻壁といえば，それは中心に向かって收斂しているだけで，轂にあたるものはなにもない。かろうじて Dharmarajika で轂のような設備をみることができるが，それは外圓の直徑にくらべて，あまりにも直徑がおおきく，南東インドの轂とは隔絕しているといってもいいすぎではない。したがって車輪狀構造の內部にいくら放射壁が走っていても，それを受けてやる設備が中心にないから，構造としては中途半端で，意味がうすかろう。これ以上に無意味だとおもわれるのは， Dharmarajika や Fil Khana では外輪壁がなく， Shah-ji-ki Dheri でもあったとは斷言できないことである。百步ゆずってあったとしても， Kankali Tila のように內側の環狀壁と同じ厚さであった可能性もある。そんなものなら圓形基壇を堅固にすることはできない。一方，Dharmarajika にはたしかに轂部はあるが，異樣におおく，放射壁はそこから渦卷狀にでている。渦卷狀の輻壁なんか，構造として價値がない。北西地方のストゥーパはみな石積であるから，南東インドの煉瓦積にくらべて，どんな積み方をしてもより堅固であるとはいえようが，それにしても外輪壁をまったくつくらないのは異樣である。

南東インドの車輪狀構造ではなぜそんなに厚い外輪壁が必要だったのであろうか。Amaravati や Ghantaśala, それに Nagarjunakonda など，極端に分厚い外輪壁が多數みられるのは，內部からの壓がきわめてつよいことを物語っていよう。そのような厚みは，もし圓胴部が低平なものであったなら，必要ないし，また意味もない。とくに Amaravati 初期の石灰岩パネルにえがかれたストゥーパのような丈の高い圓胴部では，このような外輪壁のしつらえは，ストゥーパの內部構造にとって欠くことのできないものであったにち

がいない(圖24)。おそらく分厚い環狀の壁は伏鉢の壓を上からまともに受ける圓胴部の外壁であったはずで，伏鉢自身の外壁でもなく，伏鉢とその周圍の繞道を支えることを目的としたものでもなかったであろう。したがって，このような分厚い外輪壁をもっているストゥーパの圓胴部つまり圓形基壇は，相當に丈が高かったということである。むしろ，丈高い基壇を得るために，こうした外輪壁をつくり，その幅を厚くし，さらに內部に轂部から放射狀に輻壁をつくり，中心と外輪とをむしっかり結び，構造を一層堅固にしたのであった。半球形の伏鉢を得るために，その基部外周に分厚い環狀壁を造ってかためるなどということはしまい。伏鉢の壓は圓胴部がうけるから，圓胴部外壁には龜裂が生じる。これを防ぐためには外輪を厚くすればよい。大きな面積を占め，しかも丈の高い基壇をもつストゥーパには，分厚い外輪壁は是非とも必要であったのである。そうして，外輪壁の厚みのいかんは，基壇をどのくらい高くするかによったはずである。低ければこれは不必要であり，高ければ厚くする。こういった外輪壁を含む車輪狀構造が，南東の諸例ではストゥーパのもっとも下位に置かれたのであるから，あきらかに圓形の基壇を高く建設することをめざしている。そうすることによって圓筒形の基壇は上部からかかる壓に對して堅固となり，外壁の割裂を防止する。分厚い外輪壁は圓形基壇が高かった事實を示しているのである。

かくして南東インドで野外に車輪狀構造をもって造築された大ストゥーパは基壇が高かったと見る必要がある。基壇が高いというのは，基壇の直徑に對して高さがそれと同等か若干低いかということでとらえる。野外の大ストゥーパが西インドの前期石窟寺院にみられるストゥーパと同時代の產物だとした場合，石窟寺院內の小ぶりのストゥーパだけは基壇が高く，野外のストゥーパでは低いというのは理解できないおかしさである。分厚い外輪壁は圓胴部が丈高の場合にかぎって有效な構造であり，內部が輻壁によって補強されるとき，兩者相まって內部からの壓に耐え，圓筒形の外面の煉瓦積みの割裂を防止し，基壇の安定性を獲得する。したがって Barrett (1954) が Amaravati 大塔の復原研究においてストゥーパの基壇を著しく低く歪めて圖化してしまったのは，おおいに問題がある(圖25)。分厚い外輪壁とその內側の構造にかれは想い到りながら，分厚い外輪壁の意味を全然理解していないからである。一般に，Gandhara のストゥーパについては時代とともに基壇が高大化していくといった見方がある。この見方はかならずしも當っているとはおもわないが，Gandhara 以外の大ストゥーパについてなぜかこの點に關する議論はなかった。野外の大ストゥーパは低平なのだといった Marshall 以來の考え方にしばられてきたのであろうが，南東インドでは野外の大ストゥーパの場合，車輪狀構造を容れることによって基壇を高めていたとみるべきである。

北西インドの Taxila の Dharmarajika 大塔では輻壁が伏鉢の中につくられた。

圖 24　Amaravati 初期のストゥーパ

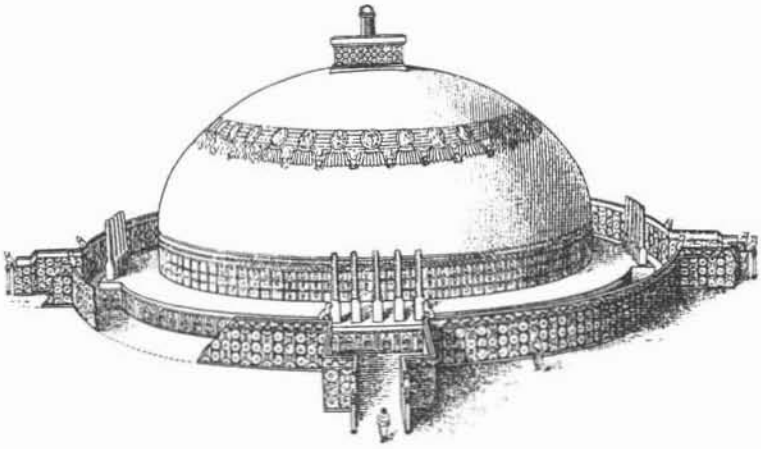

圖 25　Amaravati 大塔の Barrett による復原圖

Dharmarajika 大塔の殘高は周圍の地面から 13 m である。そのてっぺんに輻壁が露頭している。輻壁が收斂している中心の大圓形轂部の高さはあまりにも高い。葛石以下の基壇の高さを引いても高い。そのうえ，ここにはどこをみても外輪壁がない。輻壁はそのまま伏鉢の外面に至っている。おなじことが，Fil Khana のストゥーパについてもいえる。外輪壁はないし，輻壁はストゥーパの殘ったもっとも高い地點からみとめられること，Dharmarajika と同樣である。二つの例は偶然ではなかろう。北西インドのこれらのストゥーパでは，車輪構造は伏鉢の構造であり，圓胴部，あるいは基壇部のものではなかった。さらに，こういった輻壁と輻壁との間は，Dharmarajika の場合は碎石，Fil Khana の場合は河原石で充填し，繫ぎには土泥をつかっている。そうすると，ストゥーパの堅固さ，安定度は高い。南東インドのようにすべてを煉瓦で造る場合とは異なって，石積という點からして北西インドでは外輪壁をつくる必要がなかったのかもしれない。Dharmarajika の車輪狀構造は基壇の上にのせた恰好でつくってあり，それ以下には至っていないことがわかっている。車輪狀構造は何回目かの修復のときの建築である。それよりも基壇は古い。そんな工事も，用材が石，どちらかといえば平らな石だったから，可能であった。

外輪壁をつくらず，車輪狀構造自體をストゥーパの上層に置くというのは，まさに異常である。その理由としては用材ばかりではなく，もっと本質的に重要なこととして，この地方が圓形基壇よりも，方形基壇に重點を置いていたことがあげられる。しかし方形基壇と一口でいっても，ストゥーパの成り立ちからみれば奇妙な形であり，本來異常である。そんな方形基壇がはじめてあらわれたのは，Taxila の Sirkap の第Ⅱ層時代の市街のストゥーパであった（Marshall 1951, pp. 142－144, 163－167, 183）。形としては，古くからの傳統である圓胴部以上の要素は變えていない。それら全體を方形基壇を下にもってきてそれで受けたのである。方形の基壇をいちばん下に設置しただけだといっても，インド古來のストゥーパにとっては革命的である。なぜならば，ストゥーパ禮拜の右繞は宇宙軸を中心にした圓環運動であるから（Irwin, 1979），方形では意味がない。北西地方のストゥーパではこのような方形基壇がストゥーパ本體を支えていた。方形基壇の高さを高くすれば，ストゥーパの高大化は達成できた。だから南東インドのように圓形基壇しかもたないストゥーパでは圓筒部の外壁を厚くするしかなかったが，ここではそんな必要はなかったのである。

それならば，車輪狀構造なぞ不必要なはずである。どうして利用したのか。しかも南の車輪狀構造とは似ても似つかないかたちで採用している。このような南北の，車輪狀構造に對する對應のちがいこそ問題である。南東インドの工人の眼からすれば，北西地方のはずいぶん變わった代物である。北西インド，つまり Gandhara のそれは二番煎じといってよい。南東インドの方が本來の姿であり，北のは本來の意味を理解しないままで受け取っ

たものだ。これを年代の差によるものととってもよい。それでは，南東インドの車輪狀構造はなにに由來したのか。すでにわれわれは車輪狀構造の出現について，インド內部の可能性を檢討したが，みな悲觀的であった。そうすると，外部からのインパクトを考えるしかない。外部をいう場合，それがいつの外部かという意味でストゥーパの年代がからむ。いま場所は南東インドと定まっているのだから，次ぎは時閒が問題である。

ここでもう一度注意したいのが車輪狀構造ストゥーパの分布である。インド美術史なるものがいうところの，ガンダーラ美術やマトゥラー美術，あるいはアマラーヴァティー美術といった初期佛教美術の地方に，それは限られているといってよい。その美術は時代が限定されるのであるから，そこであらわれる車輪狀構造のストゥーパというものも，年代がおのずから限られてくるであろう。すくなくとも，永い閒にわたって好まれたのではなく，紀元前後の數世紀といった，一定の期閒に流行ったといえる。ここにおいて車輪狀構造の初現年代に觸れるとすれば，Nagarjunakonda の諸例は除かれるであろう。Sarkar がいうように Nagarjunakonda には Ikshvaku 朝時代以前の，つまり 3 世紀以前の遺構はないからである。車輪狀構造をストゥーパの基部に用いるという傳統は，それより古いのである。Nagarjunakonda はそれをそのまま受け繼いだのにすぎない。初現にちかい車輪狀構造のありさまを Nagarjunakonda では期待できないのである。そうすると，いままで擧げてきたストゥーパのうち，どれがもっとも古い車輪狀構造をもったものかという問題になる。しかしこれはなかなかむずかしい問題である。われわれは Nagarjunakonda の諸例を參考に，また Amaravati の項でのべたように，1 世紀には Krishna-Godavari 河口地帶でそれは採用されていただろうということで，當面滿足しなければならない。

5．アウグストゥス靈廟

車輪狀構造の出現をこの時閒のなかで，しかも亞大陸外に求めるとなると，それはローマの物產をインドにもたらし，またインドの物產を西へ運んだアラビア海の海上貿易が浮上してくる。半島部インドの歷史にとって重要なポイントを與えるその交易は，ピークを 1 世紀にむかえる（Warmington, 1974, pp. 35－38）。とくに最近の Begley らの硏究（Begley/Puma, 1991, p. 6）は，1 世紀の半ばの重要性を考古學上確信させてくれる。このような紀元前後の，半島部インドのひろい歷史の文脈のなかで，大規模ストゥーパの建設に，ローマ帝政初期の靈廟建築の技術が輸入された。このことについて以下にのべる。

車輪狀構造はインドばかりでなく，帝政初期ローマのイタリアを中心に，北や北西の屬州でもひろく好まれた墳墓建築技術であった。「インドばかり」というと語弊がある。車輪狀構造は實はインドのものではなく，ローマで發明された技術であり，ローマが本場だか

らである。

紀元前後のローマの墓廟建築のなかでもとりわけ注目されるのが，石造あるいは磚造の一連の圓形墓である。圓形墓という形はエトルスクにまでさかのぼるけれども，その内部に車輪狀構造をいれたのは Augustus 靈廟を嚆矢とする（圖 26）（Toynbee, 1971, pp. 143 ff）。Crema (1959)，Toynbee (1971)，Eisner (1976)，Virgili (1984) などに從うと，Augustus 靈廟は，基底部の直徑が 87 m もある。墓室の中軸には柱が立っていて，それは墳墓の頂上にまで達し，總高 44.65 m あったらしい。頂上には皇帝自身の彫像をすえていたという。中軸をまわって 5 重の同心圓壁，つまり壁として厚みのある巨大な圓筒が五重の入子になっている。これらが上部構造を支持していた。同心圓は外にむかって高さを遞減していたというのが通說である。もっとも外側の圓は墓廟全體をささえる壁である。外壁はトラヴァティン石が張ってあった。中心から第 2 番目の環狀壁と第 4 番目の環狀壁との間は 12 本の放射壁があって，これらの圓筒壁を相互に補強し，さらに放射壁は外へのびて外輪壁に結合している。内壓からくる割裂の防止や外壁の安定性に對する對策は，外輪壁をほかの環狀壁よりも厚くすることであり，ここでもそうである。Augustus 靈廟ではさらに

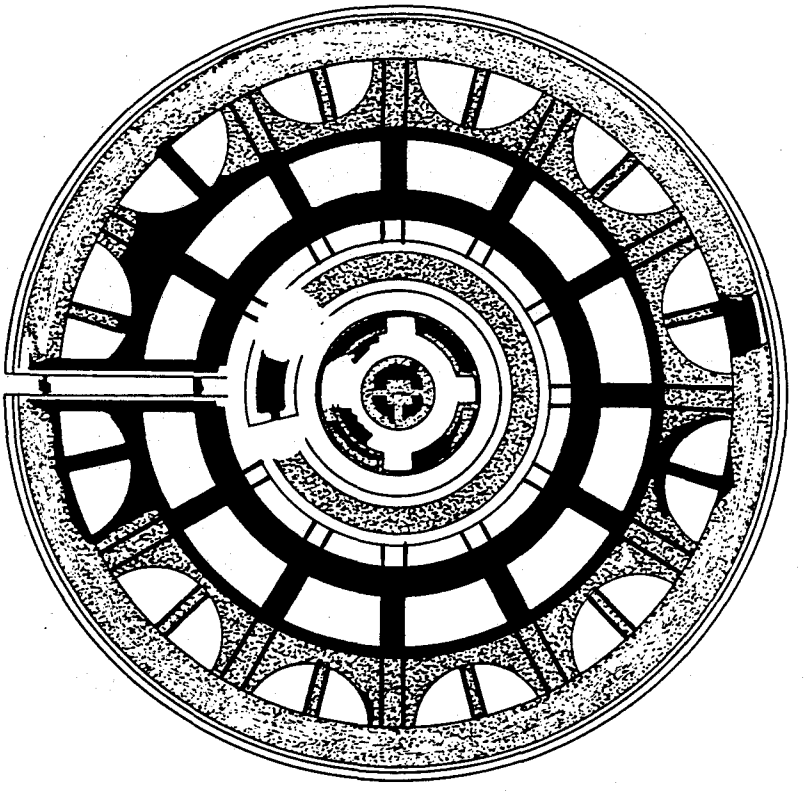

圖 26　Augustus 靈廟平面圖

一層の對策がとられている。すなわち12本の放射壁で分割された，第4，第5の環狀壁の間，もっとも外側の環狀の空間は，さらに各空間を水平アーチと放射壁で補強しているのである。第4，第5の環狀壁でかこまれた部分は，實は兩壁を合わせた厚みより厚く，きわめて安定のある外輪壁となっている。內部からの壓に充分對處でき，建築としての安定性を確保する構造が十二分にとられた。

Augustus 靈廟の復原研究はいろいろおこなわれている。Toynbee (1971) はおそらく Crema (1959) によったかとおもわれるが，いくつかの例をあげ，現狀ではいずれともきめがたいという。しかしそうであろうか。これだけ外輪壁を厚くして內壓に對する工法を創案したことを考慮したうえの復原でなければ，復原の意味がない。つまり，Augustus 靈廟でこのような分厚い外輪壁が企畫されたのは，それが87 m という途方もなくおおきな直徑をもつ圓筒に對處する必要があったということと，第3，第4の環狀壁以內の高さが高く，そこからくる高い壓に耐える工夫が必要であったからである。Crema はいくつかの代表的な復原案を4例あげている（圖27)。そのなかで Gatti や Cordingley/Richmond,

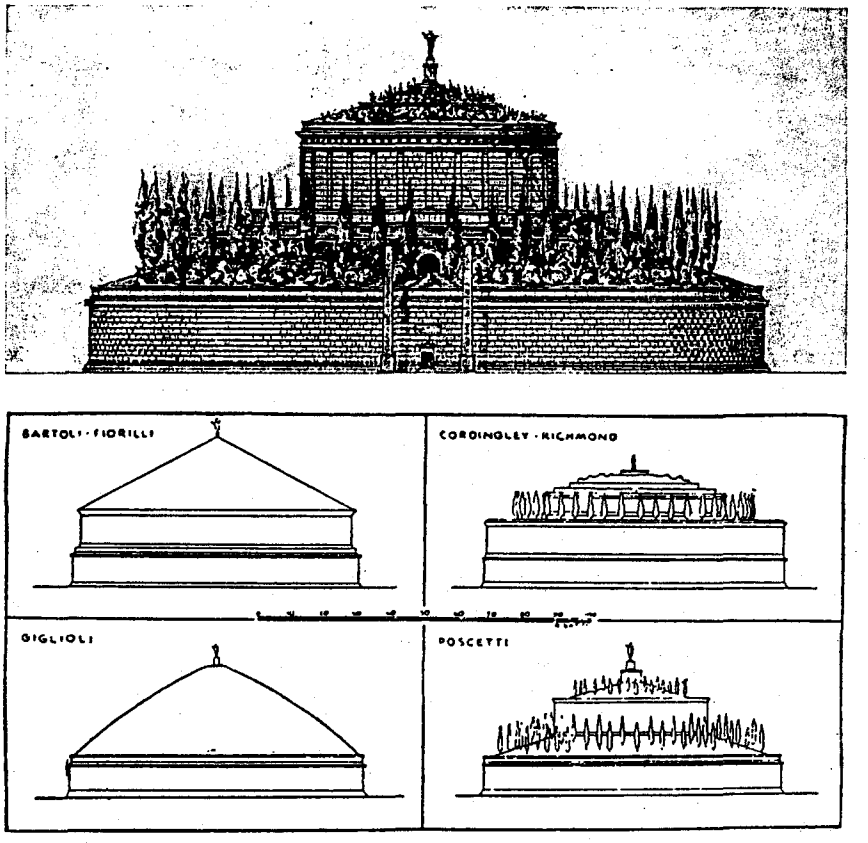

圖27　Augustus 靈廟の復原5例

Poscetti のような，なかに圓筒をおいたような復原ではそれが生されない復原である。どちらかといえば，Bartolli/Fiorilli のように上部はかなり高い半球形であり，外輪壁の高さも Giglioli が考えたよりずっと高いであろう（圖 27，左上）。こうみてくると，Augustus 靈廟の構造は南アジア亞大陸のストゥーパ構造と，技法上類縁性を否定できないどころか，むしろ，積極的に兩者は關わっている。とくに南インドのストゥーパとの關連は，外輪壁の一點をとっても，おおきい。

おおきさはまちまちであり，轂壁があったり，なかったりするけれども，輻壁をそなえた圓形の丘墳が，1，2 世紀ローマの北部あるいは北西の屬州で築造されていた。その來由は Augustus 時代のイタリアをおいてほかにありえないであろう（Toynbee, 1971, 180）。それぞれの土地に圓形墓や圓形廟の傳統があり，またブリタンニア，北部ガリア，中央ヨーロッパの屬州とその周邊地域，これらと本國イタリアとは密接な關係にあったからである。しかし最も大規模かつ堂々たる地方墳墓にしても，Augustus 靈廟からは疑いもなく距離は遠い。それにもかかわらず圓形，土饅頭，轂壁，輻壁等々の特徴を遠いイタリアと共有し，Augustus 靈廟の基部にある同心圓壁と輻壁を想起させるのである。例を Toynbee (1971) と Collingwood-Richmond (1969) からひいて以下に示す。ローマ周邊の例に關しては Eisner (1986) の專論があるので參照されたい。

(1) Kent 州の Keston 圓形墓は，直徑 8.7 m の小規模な墓で，基部が低い圓筒形，上部は圓錐形である。フリントを積んだ環狀壁の厚さは 90 cm。6 本の扶壁が放射狀に外壁から飛び出している。墓室への入口はない。

(2) Essex 州の West Mersea 墓はうえとおなじように 12 本の扶壁をもち，19.5 m の直徑。環狀壁は 90 cm の厚さ（圖 28）。この墓はいわゆる「荷車形」で，ちいさな轂から 6 本放射壁がでて環狀の外壁に至るが，みな扶壁と對應している。放射壁 8 本，4 本のものが，ローマの Via Appia の第 5 里程標附近にある。Via Tiburtina の墓では轂がなく，輻は 8 本，Via Salaria のは 6 本の輻がある（Toynbee, 1971, p. 184）。

(3) ベルギーの墳墓は構造上はブリテン島のものとおなじだが，直徑が 12 m から 43.5 m までと，一般に大型であり，時期も大概 2 世紀である。

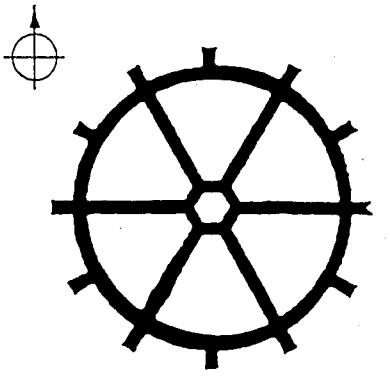

圖 28　West Mersea 墓平面概念圖

(4) ベルギーの Tournai 近くで 1954 年に發

掘されたAntoingの墳墓，あるいはドイツのTrierの墳墓，またブリテン島のKestonやWest Merseaの墳墓など，これらの墳墓をつくった地方の工人たちが，この手の墳墓をつくるための，ローマできの建築圖とか，建築手引のようなものをもっていたのはまちがいがない，とToynbeeはいう。さらに，Trierのふたつの墓，Nenning, Fremersdorfなど，Treveri族にかかわる，計四つの同じ構造の墳墓を築造したひとたちにも，このことはあてはまるという。

(5) Fremersdorfの例は煙滅してしまったが，中心の轂から4本の放射壁がでて水平アーチを竝列した外輪にいたっている。KestonやWest Merseaの墳墓におけるように，上の四つのTreveri族の墓はみな，外輪壁は基本的に「圍い」としての役割をにない，圓錐形の土饅頭を外側から保持するものであって，Augustus帝廟，Caecilia Metella, Hadrianus帝廟などイタリアの壯大な圓形墳墓の，丈高い，記念碑的な石造の圓胴部とは異なる。こういった石の「圍い」はBeaker Cultureの墳墓にみる柵，あるは青銅器時代やHalstatt期の墓をとりまく石壁ににている。

Treveri族の四墓に關して，外輪壁が圓錐土饅頭を支える，石の「圍い」にすぎないとするToynbeeの觀察は興味深い。これらすべて，外輪壁の幅はたしかに厚くないからある。イタリアの大墓廟建築の丈高い圓筒外壁とは異なっている。分厚い外輪壁は外壁の高さと關係がふかいことを證明しているのである。

上引のなかでさらにもうひとつ，南アジア亞大陸における車輪狀構造ストゥーパの出現にとって意味ぶかいToynbeeの指摘は，ローマの北部ないし北西屬州のこのような墳墓築造者たちが，イタリアできの建築手引とか建築圖のようなものをもっていたと予測したことであろう。しかしローマ出來の建築手引があったとしても，なぜ，北部，北西部のひとたちの手にそれがわたったかということであろう。要請がなければ傳入しなかったのではあるまいか。

インドの場合はどうか。外輪壁を軸にAugustus帝廟と南東インドのストゥーパが近緣とみると，まっさきに車輪狀構造がはいったのは南東インドとなるが，インドへの海上交通とその傳入はどうかかわってくるのであろうか。たしかにこの交通は，アレクサンドリアから紅海沿岸を經てインド半島の南西部に到り，あるいは半島のつけ根に達して，ローマの物產や貨幣をもたらした。あるいはいまのCoinbatoreに比定されているMuzirisにおいては，Templus Augusti（Augustus帝をまつった神殿）の存在をもってローマ文化に浴したひとびとの居留まで想定できる。「（ブリタンニアの）Hertfordshireの森から（インドの）Coromandel海岸の椰子林まで，赤いうわぐすりをかけた杯皿類（アレッティウム陶のこと）は交易商人のお定まりの冒險を象徵し、かれらの冒險譚はアレクサンドロス大王自身の遠

征譚をほんの少ししたまわるにすぎないとしてよい」と記したのは，Coromanndel 海岸の Arikamedu においてローマとの海上による交易を實地に證明した Wheeler である(1954. p. 150)。ローマ文化は屬州はもとより，西ばかりでなく，東はインドまで直接やってきた。こういった交易品のなかに車輪狀構造といった眼にみえない輸入品がふくまれていたとすれば，具體的にはどんな具合にやってきたのであろうか。もし海上交易の結果だとすれば，それはきわめて大きく偶然性に左右されたものであろう。そんな偶然にたまたま觸發されてストゥーパの中に車輪狀構造が入ったとは，私にはかんがえられない。

6．車輪狀構造導入の積極性

車輪狀構造は當時必要であったからこそ積極的に採用されたのである。そこでふたたび半島部インドの分厚い外輪壁の意義が強調されねばならない。Augustus 靈廟でもいちじるしく厚い。直徑に比例して相當に分厚い外輪壁が存在した。厚みをもつ外輪壁は，その外輪壁が維持する圓形基壇の高さと深い關係にあった。外輪壁の厚みが厚ければ厚いほど，圓形基壇の高さは高かった。基壇が低いものならば，外輪壁を厚くしてもしょうがない。上部や內側から高壓を外壁がうけないからである。

しかし當時野外の大ストゥーパの基壇がすでに高かったとする證據は皆無である。最初期のストゥーパの高さは，さきにのべたように，そんなに高いものではなかったとおもわれる。Sanchi の大塔の時代，つまり紀元前後になっても，野外の大ストゥーパの基壇はそれほど高かったとはおもわれない。Sanchi 大塔の復原整備に際して Marshall (Marshall/Foucher/Majumdar, 1940) が決定した高さはだいたい當時殘っていた高さにしたがっているからである (圖 29)。丈高い圓形基壇を造りうる技術が在來のインドにあったのに，それ

圖 29　Sanchi 第 1 塔復原圖

圖 30　Bharhut 大塔欄楯のストゥーパ圖

にかわる高度な技術としてローマから車輪狀構造を輸入したのではない。車輪狀構造が採用された同時代のインドにおいては野外の大ストゥーパの基壇はみな低かったのではなかったか。ストゥーパにはいろいろあって，屋内に造るものと野外に築造するものがあることは，すでにふれた。西インドの石窟寺院のうち，前期寺院の caitya の奥の圓堂部に掘り出されたストゥーパでは，圓形基壇は直徑と同じか，あるいはそれより高くつくられている（圖31—圖34)。屋内のストゥーパは規模がちいさいから，簡單に基壇を高くすることができる。しかし野外に大規模なストゥーパを建設する場合，上部から強い壓を受けて，なお外壁に割れが生じない大圓筒形を煉瓦でいかに築くかは，煉瓦の量の問題が解決したとしても，なお大問題であったろう。インドの1世紀にその技術はなかったのである（圖30)。野外に大ストゥーパを建設するとき，その圓形の基壇を高くする技術が，ちょうどこのころ要請されていたのである。

ヨーロッパの北や北西における車輪狀構造の出現は，帝政初期ローマとブリタンニアやガリア北部との繫がりの中で容易に理解できる。Augustus 靈廟の建築技術はローマ周緣部やイタリアにすぐにおよび，ブリタンニアやガリアにまで迅速におよんだ。その理由は，Augustus 靈廟が直徑 87 m という當時の世界最大の建築であって耳目をそばだてたという以上に，これらの地方で圓形墓を築造する傳統にくわえ，當時の最新技術あるいはローマ風新趣向にあやかるという風潮もあったであろう。しかし，インドの場合はそういった文化の波及の圈内にあったわけではない。

正確にいつ車輪狀構造がローマから輸入されたか，どのストゥーパにはじめてあらわれたかをきめることは，現狀ではいたってむずかしい。それぞれのストゥーパの年代を決める手掛かりがすくないからである。さきほどのべたように，Toynbee はヨーロッパ北部，北西部における車輪狀構造の出現をイタリア本地出來きの手引書の介在に求めたが，それを考慮したうえでもなお重視する必要があるのは，インドの使節がローマで車輪狀構造を直接實際に見聞したであろうことである。Warmington (1974 : 35－38) に從って Strabo や Dio Cassius を參照すると，インドの使節が Augustus帝の時代になると頻繁にローマにやってきたという。かれらは紀元前 26 年にはじめてローマに到達し，スペインで Augustus に會っている。さらに 25 年，21 年，17 年とそれは續き，14－11 年の閒にも一回認められる。このことは，『Res Gestae Divi Augusti』—— 神君アウグストゥスの業績錄 —— からもあきらかである。その標題はともかく，これは Augustus が自ら死の年 (14 年) に書いたものであり，「自筆の本文をティベリウスが校訂し標題をつけ，故人の希望どおり青銅板に刻み，それを Augustus 靈廟の正門入口の兩側に，一本ずつ建てた四角形の大理石柱に，四面を覆うようにはめこんだ」とされる（國原，1986, p. 206)。すなわちその 31 條に「インドから王たちの使節がたびたびわたしのもとに遣わされた。その以前はいかなる

圖 31　Bedsa 石窟のストゥーパ

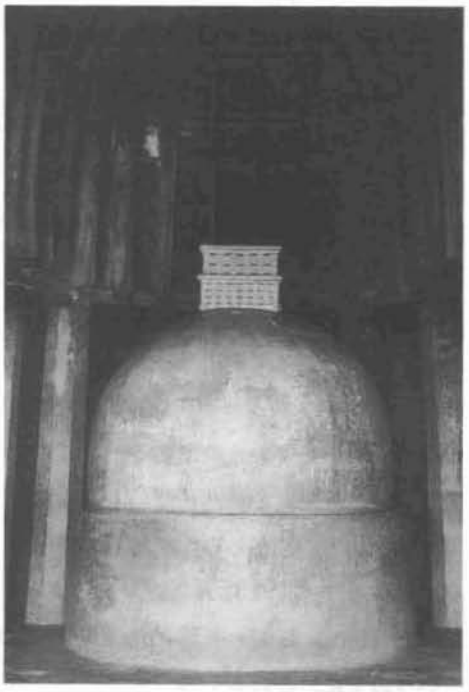

圖 32　Bhaja 石窟のストゥーパ

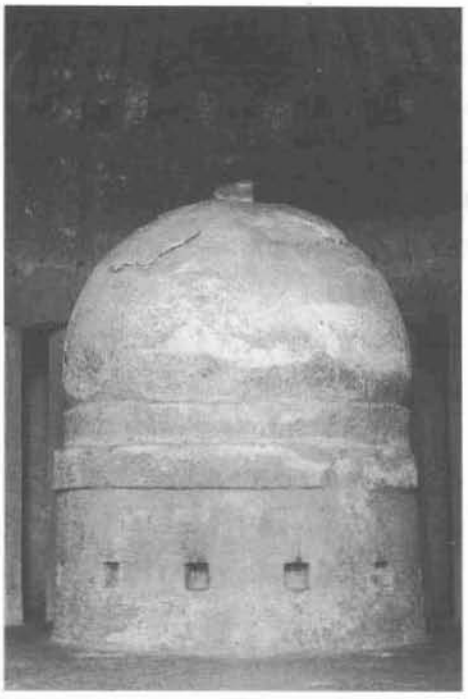

圖 33　Kanheri 石窟のストゥーパ

圖 34　Karla 石窟のストゥーパ

ローマの將軍の前にも，現れたことがなかったのに。」と（國原，1986, p. 223 ; Brunt/Moore, 1967, pp. 34, 35)。この場合引用中の「使節」にあたることばは複數形をとっている。Augustus 靈廟の建設が紀元前 28 年であることは，Suetonius の *De Vita Caesarum*（ローマ皇帝傳）における Augustus葬儀のくだりに，「遺骨は……アウグストゥス靈廟に埋葬した。この靈廟はフラミニウス街道とティベリス河岸の間に，アウグストゥスが第六回執政官の年に建てていた。」(國原，1986, p. 203) と記されていることからあきらかである。Augustus が第六回執政官の年とは前 28 年である。とすると，インドからの遠距離交易の商人たちではなく，インド王の使節，つまり公式なインドからの使節が Augustus に拜謁したのは，なんと靈廟建築開始後わずかに 2 年目であったことになる。當時世界最大の建築にローマ人士のうわさは高かったであろう。はじめてローマに到達したインド使節たちもそれに注意を向けたはずである。その大建築は圓形プランの大建築であり，みずからの土地のストゥーパ建築に照らしてその技術にたかい關心をもたなかったはずがない。

車輪狀構造がローマとの海上交易によってはじめてやってきた技術だとしたら，いつ來るかわからないものを默って待つしかなかったであろう。偶然に到來したから飛びついてストゥーパの中に採り入れてみたのであろうか。そんな技術がインド側の要請もなしに舶載されてくるであろうか。積極的にインド側からこれを求めたとみなければ問題の解決にはならない。紀元前 26 年にはじめてローマをおとずれ，Augustus帝に拜謁したインド使節が實際にローマでこの技術に接してインドにもたらしたのではなかったか。Augustus 靈廟の車輪狀構造は古くからローマにあったものではない。直徑 87 m という大圓筒形の建設に際して考案された最新技術であった。それだからこそ，かれらは積極的にそれを攝取したのである。したがってインドにおける車輪狀構造ストゥーパはすべて前 26 年をさかのぼらない。Augustus帝に拜謁した使節を，インドのどこの，だれ王が送り出したか，今の西インド邊の西クシャトラパか，あるいは南東インドの支配者か，これは殘念ながらわからない。ただし，もっと北の Taxila-Gandhara あたりの勢力でなかったことだけは確かである。そのあたりの車輪狀構造がいかにも車輪構造の本義を知らず，二番煎じであることは先述したとおりである。そんなものをローマから直輸入した連中がはじめから造るはずがないからである。

7．導入の年代と意義

ところで，本義に近いか遠いかといった差を傳達の時間差ととると，もうすこしだけ車輪狀構造の導入年代を狹めることができる。Gandhara のストゥーパの年代については，Andhradeśa のものより幾分か鮮明であり，Taxila-Gandhara のストゥーパの年代を考

えることによって，導入の最初の地である Andhra のストゥーパの年代に枠をはめることができるからである。手がかりはタキシラの Dharmarajika 大塔である。

車輪狀構造が本來ローマ皇帝廟の基礎の大圓筒形を強固にするために案出されたものであったこと，それに，この事情がよく理解されてつかわれた Andhra 地方の使い方からみると，伏鉢という上部構造に車輪構造を使ったこの大塔は，本義にまったく無頓着，というより，むしろ無知といってよいであろう。これに較べると Gandhara の Shah-ji-ki Dheri や Mathura の Kankali Tila は，基壇こそ低けれ，基礎にこの構造をつかっているという點で，まだしも本來にちかい。しかしどちらも轂相當の設備を欠いているから，車輪狀構造本來の意味からは離れている。そこでこの違いに注目して，それを年代差とみると，Dharmarajika の伏鉢部の建設年代がきまれば，これをもっとも新しい車輪狀構造の南アジア亞大陸における型式とみて，車輪狀構造輸入の下限年代を定めることができるであろう。

Dharmarajika 大塔の伏鉢內部を補強した放射壁は圓形基壇のすぐ上から立ち上がっていて，基壇の中には基礎をもっていない。まえにふれたとおりである。つまり伏鉢部は當初の建築ではなく建て直しである（桑山，1974, 335 f.; Marshall, 1951, p. 236）。同時代の建て直しは Taxila のほかの地域にもみられるが，このとき考案されたのが Diaper と名づけられた壁の外裝の石積である（圖 36）（Marshall 1960 : Pl. 10, b, c）。その Diaper 積が放射壁を造った伏鉢の外裝に使われたらしい。というのは，現在殘されている伏鉢の外裝をみると Diaper 積が伏鉢の西側の基部に若干殘っているほかはみな Diaper 以後の幾種類かの石積であり，Diaper がいちばん古い石積だからである（Marshall, 1951, p. 236）。したがって Diaper 積の年代を確定できれば放射壁の年代，車輪狀構造の年代を推せる。

タキシラでは時代に從って建造物の石の積み方が變遷する。Rubble masonry（亂石積）（圖 35）はおそくとも紀元前 6 世紀から數百年にわたって永續した（Marshall, 1960, pl. 10, a）。都市 Sirkap のほとんど最後の市街である第 II 層期（Wheeler の Phase 3 に相當），だいたい紀元後 1 世紀に Diaper 式があらわれてこれにとってかわる。亂石積は中位のおおきさの石を單純に積み，石と石との間には小さなバラスを詰めこんでいく。これに對して Diaper 式では，石の大きさをだいたい揃える（圖 36）。これを水平に列置する。石と石の間には厚さを揃えた平石を丁寧に積み込む。こうして次第にできあがった層狀の石の列のうえに再び同じように層をつくっていく。壁面は大石同志によって菱形紋樣がつくられるから Diaper といい，壁面を強固にするために Rubble 積みを改良した外裝の石積み形式である。この場合でも壁の內部は Rubble 積みである。Sirkap では亂石積の家壁でこわれたところを Diaper で補修し，あるいはまったくあらたにこのやり方で家が建った。またストゥーパにも用いられた。Block 1 E′ のストゥーパがそれであることは前にふれた。要す

圖 35　亂石積 Rubble Masonry の例。Jandial D 遺跡

圖 36　菱形積 Diaper Masonry の例。Dharmarajika D 8 遺構

るに Sirkap 第Ⅱ層期において古くからつかわれてきた Rubble masonry が改良型の Diaper にその地位をゆずった。Sirkap はそのすぐあとに役割を終え，Taxila の中心は新建設の都市 Sirsukh に移る。Sirsukh の時代に Diaper は層と層との間に薄い割石層をいれるようになり，その層は次第に煉瓦のように一定した大きさ厚さの化粧切石を列べるようにかわっていき，Semi-ashlar 式へと發達する。Dharmarajika 大塔の西に殘った Diaper 式の石積は，石積としてこういった位置にある。

Diaper 式石積の導入年代を，Allchin (1968, p. 19－23) は出土貨幣と都市 Sirkap の層位とをからめて檢討している。それによると，ストゥーパが中央路に面して建ち竝ぶ Sirkap 第Ⅱ層期は，Saka の Azes Ⅱ世の末年に建設され，Kushan の Kujula Kadphises と重複する時代である。この場合 Allchin は，Gondophares を Azes Ⅱ世と同時代のやや古い世代であって，Taxila とはほとんどかかわっていないとみている。この考えにたつと，Sirkap のあたらしい石積である Diaper は Kujula Kadphises 麾下の Kushan がこの地方にあらわれた時代である。この檢討の結果を Dharmarajika 大塔にあててみると，伏鉢の建設は Kujula Kadphises 時代であり，それより古くにはならない。

伏鉢の內部構造である車輪狀構造が圓形基壇のなかにまで至っていないことは，きわめて重要である。圓形基壇は，その外面が後補であるなしにかかわらず，車輪狀構造よりも古い部分だという事實を示しているからである。この古い部分に對應する小建築が Dharmarajika 大塔の周圍に存在する (圖 12)。一定の幅の Pradkshinapatha をはさんで大塔周圍をみっしり取り圍んでいる小建築物である。いまみるそれは長い時代にわたって造立されたものであるから，それらの石積を丁寧に分類し，それに基づきつつ，各建築の伐り合い具合を觀察して，造立順序を解いていくと，Diaper 式の石積の直前にどんな建築があったかがわかる。それは Kanjur 切石裝のストゥーパである。これは內核を Rubble 式で積み，外裝はやわらかい多孔質の Kanjur 石を方形に伐って組み合わせたストゥーパである (圖 37)。

そういった小建築はだいたい小さいストゥーパであり，舍利室がつくられている。おおくは埋納物を欠損しているが，たまたま殘ったもののうちで，貨幣が發見されることはなおのことすくない。しかし貨幣があった場合はきわめて特徵がある。すなわち Maues 貨と Azes Ⅰ世貨が共伴するか (Stupa S 8)，あるいは Azes Ⅰ世貨だけを納めている (Stupa R 4)。Kanjur 切石外裝の小ストゥーパである T 12 では Kujula Kadphises 貨，Stupa No. 4 では Augustus Caesar 銀貨を容れていた。これはローマ初代皇帝にして皇帝廟建設者の Augustus である。いっぽう Dharmarajika とおなじ Kanjur 切石裝のストゥーパは Sirkap 第Ⅱ層期市街にもあり，Block 1 G のストゥーパでは Azes Ⅱ世貨を 8 枚も埋納している。つまり，Sirkap と Dharmarajika とを通じて，內部を Rubble，外裝を

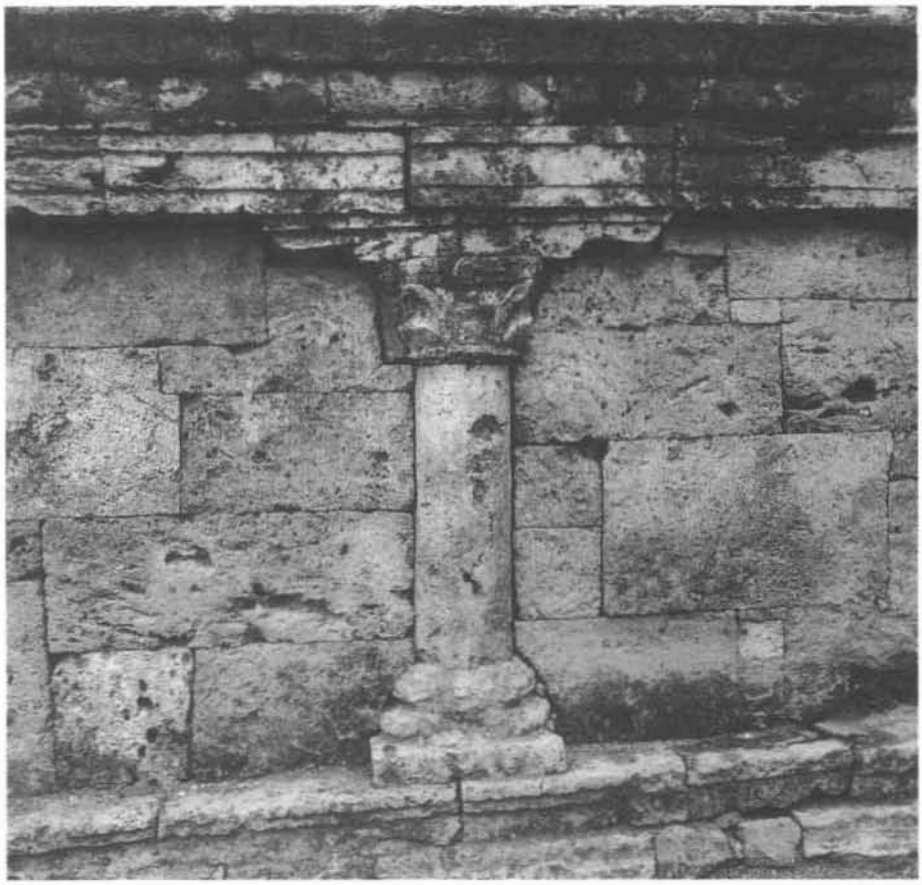

圖 37　Kanjur 切石裝の例。Sirkap 1F ストゥーパ

Kanjur とするストゥーパは，Azes II 世貨と Kujula Kadphises 貨をこのんで納めた時代である。それより年代のあたらしい貨幣はなく，Kanjur 切石裝ストゥーパは Kujula Kadphises と同時代か，あるいはそれよりあたらしい時代であり，決してそれ以前ではない。

これに對して，Kanjur 切石裝ストゥーパの直後に現れる Diaper 式のストゥーパ，すなわち最初期に屬する Diaper 石積みストゥーパでは，Sirkap の Block 1D の stupa で 8 枚の Azes II 貨，2 枚の Kujula Kadphises 貨，2 枚の Kadphes 貨がいっしょに埋納され，Dharmarajika の Stupa N 7 が Azes I 貨 1 枚，G 7 が Azes 紀元 136 年 (136 -BC 58 = AD 78) 銘をもつ薄い銀板を出土している。したがって埋納貨幣の觀點では，Azes II から Kujula までが Kanjur 切石外裝と初期diaper 式との兩形式の混在の時代であり，Diaper 裝ストゥーパはおそらく Kujula　Kadphises から Vima 時代にかけて優勢になっていった。

Dharmarajika 大塔が補修されたとき車輪狀構造が伏鉢にとりいれられた。車輪狀構造は，Marshall がいうとおり，Sirkap 第Ⅱ期層とおなじ型式の Rubble masonry でつくられ，伏鉢の外壁は Diaper で築いた。そうして車輪狀構造が入り込まない，補修以前の基壇と Kanjur 切石外裝の小ストゥーパとは同時代である。ストゥーパに埋納された貨幣の分布は，以上の建築物の前後關係にうまくそった分布であって，われわれは Diaper 式石積法の出現を Allchin 說より若干新しいものとみることになった。Dharmarajika の車輪狀構造の年代はほとんど Kujula Kadphises 時代か，やや降った時代である。Kujula について知られている年紀は 122－136 年に入る。これらは Azes 紀元であるから，AD 64－78 となり，ほぼ 1 世紀第Ⅲ四半世紀に Dharmarajika の車輪狀構造の年代を求めることができる。そうすると，これより本來の形式を理解していたとおもわれる，南東インドの車輪狀構造のストゥーパは，およそ 1 世紀前半だということになる。もちろん南東インドの車輪狀構造のストゥーパのなかには，Nagarjunakonda を除いてもなお，これより時代の降る例があるかもしれない。したがってこれこれが 1 世紀前半のストゥーパだといいきることはできない。導入年代については，幅廣くとらえるならば，インド使節が Augustus帝に會った紀元前 26 年と紀元後の 1 世紀中葉までの高々百年にもみたない閒となる。このあまりにもせまい年代の枠は，かえって車輪狀構造の技術をインドにもたらしたのがほかでもない Augustus帝に會見したインド使節自身であった可能性を高くする。

Augustus 靈廟の建築技術は，インドのストゥーパ建築にとってこの時代おおいに需要があったのである。ヨーロッパの例は墳墓建築であり，イタリアの本土と近緣である。ローマとはいかにも近い。しかし，インドは火葬だが，元來墳墓をつくらない。一方ストゥーパも原初は墳墓ではない(Irwin, 1979)。釋迦の骨灰を納めたものという意識が強まったとき，墳墓と認識されたであろう。この考え方がインドの宇宙觀のなかで出現したとすれば，それは多分に外來思想である。1 世紀のローマに火葬が流行したことは，先記 Suetonius によるまでもなく，考古學上まぎれもない事實である。車輪狀構造は單に建築技術の要請として輸入されたのであるが，14 年の死以降「神君」となったローマ皇帝，Divus Augustus の墓廟というものが，當時の世界の最大の建築であってみれば，インドにおいてはストゥーパに對して一大聖者の廟所という觀念を育成したことも考えられるであろう。この場合，車輪狀構造の出現に關してわれわれがこれまで採ってきた見方とはまったく異なった視點にいることになる。小規模ストゥーパでは既に成立していた丈高い圓形基壇を大規模ストゥーパで得る建設の方途を知らなかったという假說，これとは一線を畫する視點である。つまり，Augustus 靈廟という巨大な圓形建築が Augustus にあたえられた神性とあいまって，インド，とくに南東インドにおけるストゥーパの巨大化を促進したかもしれないということである。そうしてこのローマの大建築の圓形基壇が低平で

はなく，異常に高大であったことが，結果的にストゥーパのそれの高大化を招いたということにはなろうが。

最後に再び北西地方の車輪狀構造についてのべる。Gandhara では輻壁は伏鉢につかわれ，また外輪壁はつかわれなかった。北西地方では車輪狀構造を南東インドから受け取ったことは受け取ったが，本來の意味なんかをかんがえる必要がなかったのである。圓形基壇を高くしようという氣はまったくなかったからである。Taxila-Gandhara ではストゥーパの外形に關して，まったく異なった要素を採り込んだ。それが丈高い方形基壇である。方形基壇は單なる四角い箱形の壇ではない。壁面は壁柱で飾り，上部も基部も實際の建築，といっても邸宅とか會堂といった，世俗建築ではなく，とくに神殿建築の風を襲ったものであることは，別に示したことがある（桑山，1990, p. 6 ff.)。それならどこからそんな神殿風の基壇などを得たかというと，北西地方に近接した Bactria からではなく，これも帝政初期のローマの墓廟から受け取ったとかんがえねば解決しない（桑山，1978, pp. 197－212)。ここでは方形基壇をもった帝政初期ローマの墓廟建築にその淵源があるとはっきりといえる。例は Via Appia にある Caecillia Metella 墓廟である。一邊 28.2 m の方形基台があり，その上に直徑 30 m の圓胴部がのる，１世紀末ないしは２世紀初頭の墓廟である。San Vito 近くの Pozzuoli や Napoli 近くの Marano にある諸例は裝飾のない箱形の基台ではなく，壁柱や軒蛇腹をきちんともっている。Pozzuoli 墓にはストゥッコ製の壁柱があり，それが pediments を支え，その上には軒蛇腹があって，ストゥーパの基壇の仕様とまったく同じであったし，Marano 墓ではもっと手のこんだこれら建築裝飾が煉瓦でつくられていた（Toynbee, 1971, pp. 155 － 156)

１世紀あるいはそれ以前のインドではどのストゥーパも基部から圓形の平面をもつものしかなかったから，Taxila-Gandhara では方形基壇を傳統に反して採用したことになる。新趣向のストゥーパは，Sirkap 第Ⅱ層期にはじめてあらわれる。Sirkap の Blocks １A, １F, １G のストゥーパと Dharmarajika の北區にある Stupa No. 4 は，そういった例の初期のものであり，Kanjur 切石裝のストゥーパがそれなのである。壁柱をそれぞれの石に掘り出したのちに，それをドライメイソンリーで組み上げた。また基部には刳型を Kanjur で造りだし，軒蛇腹もそれらと對になっている。このような外裝は最終的にストゥッコ仕上げをし，Marshall が發掘のとき觀察したように，赤，橙，黃色の彩色があった。この三色彩色は上にあげたローマの墓廟の方形基壇にも認められる。

Andhra でも，Gandhara でもストゥーパを建築として一層もりあげるために，帝政初期（といってもそれはほとんど Julius-Claudius 朝時代）のローマから，新機軸の墓廟建築に範をとってその要素を積極的に輸入した。しかし，Andhra と Gandhara とのちがいは歷然としている。前者ではストゥーパに本來不可欠である圓形基壇を變えることなく，その高

さを高大化するという，傳統文化の域内で異文化を採り入れた。一方，Gandhara ではストゥーパとしてはまったく異様な方形基壇を採用することによって傳統をこわしつつ，あらたな建築文化の展開を促した。この場合きわめて興味深いのは，車輪狀構造が Andhra から Mathura や Chandigarh を通って Gandhara にいたり，そこで本義とちがった形ながら受け容れられたのに對し，方形基壇はインド各地へは逆流せず，ほかに出ていくことがなかった點である。ここに亞大陸北西地方，つまり『大唐西域記』卷 2 においてはインドの正境にあらざる曲俗の「北印度境」の風土が濃厚にあらわれている。車輪狀構造の觀點からみれば，文化は最初西から東へ，それから，正確には南東から北西へ，ざっとみれば東から西へ，と傳達された。

注

Ratnagiri は Mitra (1981) が發掘した Orissa のストゥーパである。車軸と放射壁をそなえている。年代ははやくて 5 世紀、あるいは 8 世紀まで下がることも考えられる。ストゥーパ全體は方形の古い遺構の上に築いてある。方形プランはほかよりもおくれて Orissa で出現するから，Mitra が放射壁を 8 世紀としたのは正しい。ストゥーパ周邊部はこわれていたので，外輪壁は發見されていない。放射壁はそれぞれ外に向かって若干開いた形になっていて，ここで取り扱った諸例の放射壁とは全然違う。またそれらが置かれたレベルもストゥーパの基壇ではなく，大分高い位置である。なぜこんなあたらしい時代に放射壁がつかわれたのか。あるいはこれこそ法輪象徵論者にもってこいの事例であるかもしれない。

表1　車輪状構造をもつ遺構とその細部要素

	直徑（m）	轂	輪數	外輪幅	輻數（内から外へ）
南東インド					
1．Ghantaśala	33.3	■	3	6.15	(4 + 12) + 16
2．Peddaganjam, No. 2	11.65	?	2 ?	1.15	8 ? + 12
3．Alluru	23	●	1		16
4．Adurru	20.4	●	2		16 + 24
5 A．Kodavali	?	内實	2		?
5 B．Salihundam	?	?	1		8
6．Amaravati	41.4	?	1 + ?	2.4	?
7．Nagarjunakonda					
No. 1	27.3	●	3		8 + 16 + 16
No. 6	15	●	1		8
No. 21	15	●	1		8
No. 5	14.7	●	2		8 + 12
No. 9	12.5	□	2		8 + 16
No. 3	10	□	1		8
No. 30	8.4	●	1		6
No. 32 A	8.1	●	1		6
No. 14	8.1	◎	1		4
No. 52	6.6	◎	1		4
No. 54	6.6	◎	1		4
No. 105	6.6	●	1		4
No. 27	4.5	×	1		4
No. 108	4.5	×	1		4
8．Ter	26	?	1		8
北西地方					
9．Kankali Tila	18.85	×	2		8 + 8
10 A．Sanghol, No. 1	16.8	◎	3	1.07	12 + 24 + 32
10 B．Sanghol, No. 2	3.7	◎	1		8
11．Tahkal Bala A	31.5	×	2		16 + 16
12．Dharmarajika	34.5	●	0		16
13．Block 1 E′, Sirkap	12 × 10.8	×	1		4 + 4
14．Shah-ji-ki Dheri	56 − 72	×	0		8
15．Fil Khana	15.2	×	0		8
帝政初期ローマ墓廟					
16．Augustus 靈廟	87	◎	5		0 + 0 + (12) + 12 + 24
17．West Mersea 墓	19.5	◎	1		6
18．Via Appia 墓	20	◎	1		8
19．Via Tiburtina 墓	?	×	1		8

凡例　×：轂なし，●：内實の轂，◎：中空の轂，■：方形内實の轂，□：方形中空の轂。

表2　法輪の輻の數

Amaravati	28：法輪柱（Barrett, 1954：Pl. 28).
	31：法輪（Barrett, 1954：Pl. 16).
	63：法輪柱（Sivaramamurti, 1956：Pl. 63, 3).
	64：—（Sivaramamurti, 1956：Pl. 20, 2).
	81, 81：佛足の法輪（Barrett, 1954：Pl. 47).
	無數：法輪柱（Barrett, 1954: Pl. 8, b).
	無數：—（Barrett, 1954: Pl. 9, a, b).
	無數：—（Barrett, 1954: Pl. 20).
Sanchi, Stupa 1	16：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 40).
	20：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 22).
	22：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 69, c).
	25：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 26).
	26：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 27).
	28：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 37, a).
	32：車輪（Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 23).
	34：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 2：Pl. 41).
	38：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940：Pl. 60).
Sanchi, Stupa 2	12：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 91, h).
	16：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 91, g).
	16：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 74, 1 c).
	16：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 74, 3 a).
	16：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 86, 66 b).
Sanchi, Stupa 3	17(？)：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 103, b).
	20：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 101).
	24：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 97, 24).
	27：(Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, 3：Pl. 103, e).
Mathura	15：台座の法輪（Joshi, 1966：Pl. 9）
Sanghol	22：法輪（Gupta, 1985：P. 76).
Gandhara	8：法輪柱（Kurita, 1988, 2：Fig. 791).
	10：法輪（Kurita, 1988, 2：Fig. 852).
	11：アーチ内の法輪（Kurita, 1988, 1：Fig. 299).
	15：佛足の法輪（Kurita, 1988, 1：Fig. 283).
	24：佛足の法輪（Kurita, 1988, 2：Fig. 783).
	24, 24：—（Kurita, 1988, 2：Fig. 786).
	35, 20：—（Kurita, 1988, 2：Fig. 784).
	45, 42：—（Kurita, 1988, 2：Fig. 755).
	57：—（Kurita, 1988, 2：Fig. 782).
	7：初轉の法輪（Ackermann, 1975：Pl. H, 15).
	9：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 276).
	13：—（Ingholt, 1957, 75—Taxila).
	13：—（Ingholt, 1957, 77—Peshawar).
	16：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 280).
	24：—（Kurita, 1988, 1：Fig. p 3－II).
	4, 4, 4：三寶（Kurita, 1988, 1：Fig. 288).
	6, 6, 6：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 295).
	8, 9, 8：—（Kurita, 1988, 2：Fig. 769).
	9, 9, 9：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 282).
	10, 10, 10：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 277).
	11, 11, 11：—（Faccenna, 1962：Pl. 230, a).
	12, 12, 12：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 274).
	12, 13, 11：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 285).
	14, 14. 13：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 298)
	14, 14, 14：—（Kurita, 1988, 1：Fig. p 3－III).
	18(？), 18, 18：—（Faccenna, 1962: Pl. 119).
	24, 24, 24：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 294).
	9, 12, 9＋10：三寶と法輪（Kurita, 1988, 1：Fig. 296).
	11, 11, 13＋14：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 291).
	12, 13, 11＋11：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 290).
	12, 13, 13＋15：—（Kurita, 1988, 1：Fig. 292).
	11, 10, 8＋Lotus：三寶と蓮華（Kurita, 1988, 1：Fig. 293).
	18, 18, 18＋Lotus：—（Ackermann, 1977：Pl. 24, a).

插圖目錄

1．車輪狀構造をもつストゥーパの分布（白ぬき三角は車輪狀構造をもたないストゥーパ）
2．Ghantaśala のストゥーパ平面立面圖（Rea, 1894, pl. 14）
3．Adurru のストゥーパ（IAR 1985－86, pl. 1）
4．Mackenzie による Amaravati 大塔平面圖（Burgess, 1970）
5．Nagarjunakonda の第1ストゥーパ平面圖（Gupta, 1985）
6．Nagarjunakonda の第9ストゥーパ（Sarkar, 1960, pl. 35）
7．Kankali Tila のストゥーパ平面圖（Smith, 1969, pl. 3）
8．Sanghol 第1ストゥーパ區平面圖（Gupta, 1985, p. 16）
9．Sanghol 第1ストゥーパ南西部の遺構（分厚い輪壁とその外側の輪壁：桑山 951506）
10. Sanghol 第2ストゥーパ（IAR, 1985－86 B, pl. 23）
11. Tahkal Bala のストゥーパ平面圖（Errington, 1987）
12. Dharmarajika 大塔とその周圍の建築群（Marshall, 1951, pl. 45）
13. Sirkap の Block 1E′ と 1F にあるストゥーパ（Marshall, 1951, pl. 24）
14. Shah-ji-ki Dheri 大塔平面圖（Kuwayama, 1997）
15. Fil Khana ストゥーパ平面，見通し圖（Mizuno, 1967, plan 11）
16. Sanchi 第1ストゥーパ北門浮彫の法輪（Marshall/Foucher/Majumdar, 1949, pl. 26）
17. Amaravati 大塔出土の浮彫佛足の法輪（Knox, 1992, fig. 122）
18. Gandhara の初轉法輪圖の法輪（Pehsawar 博物館：Inghold, 1957, fig. 77）
19. Rathacakra 圖（Gelder, 1985, p. 311）
20. Vaiśali のストゥーパ（Sinha/Roy, 1969, fig. 4）
21. Pauni の Jagannatha Tekdi ストゥーパ（Deo/Joshi, 1972, fig. 3）
22. Bhattiprolu のストゥーパ（Rea, 1894, pl. 2）
23. Butkara I の大塔初期の平面（Faccenna, 1980, ii, pl. 1）
24. Amaravati 初期のストゥーパ（Barrett, 1956, pl. I, a）
25. Amaravati 大塔の Barrett による復原圖（Barrett, 1956, fig. 2）
26. Augustus 靈廟平面圖（Toynbee, 1971, fig. 14）
27. Augustus 靈廟の復原5例（Crema, 1959, fig. 264）
28. West Mersea 墓平面概念圖（Collingwood/Richmond, 1969, fig. 56 b）
29. 修復後の Sanchi 第1塔（Marshall/Foucher/Majumdar, 1940, pl. 5）
30. Bharhut 大塔欄楯のストゥーパ圖（桑山 951110：The Indian Museum, Calcutta）
31. Bedsa 石窟のストゥーパ（桑山 20216）
32. Bhaja 石窟のストゥーパ（桑山 20512）
33. Kanheri 石窟のストゥーパ（桑山 20901）
34. Karla 石窟のストゥーパ（桑山 20303）
35. 亂石積 Rubble Masonry の例。Jandial D 遺跡（桑山 940412）
36. 菱形積 Diaper Masonry の例。Dharmarajika D 8 遺構（桑山 96014）
37. Kanjur 切石裝の例。Sirkap 1F ストゥーパ（桑山 940303）

參考文獻

Ackerman, H. C. (1975) *Narrative Stone Reliefs from Gandhara in the Victoria and Albert Museum in London*, Rome.

Allchin, F. R. (1968) Archaeology and the Date of Kaniṣka : The Taxila Evidence. A. L. Basham ed., *Papers on the Date of Kaniṣka*, Leiden, pp. 4 – 34.

Barrett, D (1954) *Sculptures from Amarāvatī in the British Museum*. London.

Barthoux, J. (1933) *Le fouilles de Haḍḍa* : 1. *Stupas et sites, texte et dessins*. Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan, 4, Paris.

Begley, V. /R. D. de Puma (1991) *Roma and India : The Ancient Sea Trade*, Madison.

Brunt, P. A. /J. M. Moore (1967) *Res Gestae Divi August. The Achievements of the Divine Augustus*, Oxford.

Burgess, J. (1970) *The Buddhist Stupas of Amaravati and Jaggayyapeta in the Krishna District, Madras Presidency, Surveyed in 1882*. London, 1887, repr. Varanasi, 1970.

Burgess, J. (1874) The Lanjadibba or Mound at Bhattiprol, Rapalli, Taluga. *The Indian Antiquary*, 3 (1874), p. 124.

Bühler, G. (1894) The Bhattiprolu Inscriptions. *Epigraphia Indica*, 2, pp. 323 – 329.

Casson, L. (1989) *The Periplus Maris Erythraei : Text with Introduction, Translation, and Commentary, Princeton.*

Chandra, R. (1919 – 20) Some Unpublished Amaravati Inscriptions. *Epigraphia Indica*, 15, pp. 258 – 275.

Cimino, R. M. (1994) *Ancient Rome and India*, New Delhi.

Collingwood, R. G. /I. Richmond (1969) *The Archaeology of Roman Britain*, rev. ed., London.

Crema, L. (1959) *La Architettura Romaa*, Torino.

Deo, S. B. /J. P. Joshi (1972) *Pauni Excavation 1969–70*, Nagpur.

Eisner, M. (1976) Zur Typologie der Mausoleen des Augustus und Hadrian. *Römische Mitteilungen*, 86, pp. 319 – 324.

Eisner, M. (1986) *Zur Typologie der Grabbauten im Suburbium Roms*, Mainz.

Errington, E. (1987) Tahkāl : The Nineteenth-Century Record of Two Lost Gandhāra Sites. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 50/2, pp. 301 – 324.

Faccenna, D. /M. Taddei (1962) *Sculpture from the Sacred Area of Butkara I (Swat, W. Pakistan)*, 2, Rome.

Faccenna, D. (1980) *Butkara I (Swat, Pakistan)* 1956 – 1962, 1, IsMEO Reports and Memoirs, iii– 1 , Rome.

Foucher, A. (1905) *L'Art gréco-bouddhiques du Gandhâra*, 1, Paris.

Fabrègues, C. (1987) The Indo-Parthian Beginnings of Gandharan Sculptures. *Bulletin of the Asia Institute*, n. s. 1, pp. 33 – 43.

Fussman, G. (1974) Ruines de la vallée de Wardak. *Arts Asiatiques*, 30, pp. 65 – 95.

Gelder, J. M. van, tr. (1985) *Mānava Śrautasūtra belonging to the Maitrāyaṇīsaṃhitā*. Delhi, 1963, repr. 1985.

Gupta, S. P. ed. (1985) *Kushana Sculptures from Sanghol (1st–2nd Century AD) : A Recent Discovery*, No. 1, New Delhi.

Hargreaves, H. (1910 – 11) Excavations at Shah-ji-ki Dheri. *Archaeological Survey of India,*

Annual Report 1910–11, p. 25 – 32.

Haslett, P. (1876) Report on Archaeological Explorations at Tahkāl near Peshāwar. *Punjab Government Gazette, Supplement*, 30th March 1876, pp. 238 – 39.

Huntington, S. L. (1985) *The Art of Ancient India*, New York/Tokyo, 1985.

IAR (1957 – 58) Excavation at Nagarjunakonda, District Guntur. *Indian Archaeology 1957–58 : A Review*, pp. 5 –9.

IAR (1961 – 62) Stupa-Mound and Early Sculptures, Ter, District Osmanabad. *Indian Archaeology 1961–62 : A Review*, p. 102.

IAR (1967 – 68) Excavation at Ter, District Osmanabad. *Indian Archaeology 1967–68 : A Review*, p. 35.

IAR (1971 – 72) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1971–72 : A Review*, pp. 39, 41.

IAR (1972 – 73) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1972–73 : A Review*, p. 28.

IAR (1984 – 85) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1984–85 : A Review*, pp. 62, 66.

IAR (1985 – 86 A) Excavation at Adurru, District East Godavali. *Indian Archaeology 1985–6 : A Review*, pp. 1 –2.

IAR (1985 – 86 B) Excavation at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1985–86 : A Review*, pp. 67 – 69.

IAR (1989 – 90) Excavations at Sanghol, District Ludhiana. *Indian Archaeology 1989–90 : A Review*, pp. 88 – 94.

Inghold, H. /I. Lyons (1957) *Gandharan Art in Pakistan*, New York.

Irwin, J. (1979) The Stūpa and the Cosmic Axis : The Archaeological Evidence. M. Taddei, ed., *South Asian Archaeology 1997*, 2, Naples, pp. 799 – 845.

Joshi, N. P. (1966) *Mathurta Sculptures : A Handbook to Appreciate Sculptures in the Archaeological Museum, Mathura*, Mathura.

Knox, R. (1992) *Amaravati : Buddhist Sculpture from the Great Stūpa*, London.

Kottkamp, H. (1992) *Der Stupa als Repräsentation des buddhistischen Heilsweges, Untersuchungen zur Entstehung und Entwicklung architektonischer Symbolik*, Studien in Oriental Regions, 25, ed., W. Heissig/H. -J. Klimkeit, Wiesbaden.

國原吉之助 (1986)『スエトニウス著　ローマ皇帝傳』(上), 岩波文庫　青 440 –1.

Kurita, I. (1988) *Gandharan Art : I. The Buddha's Life Story*, 2 vols., Tokyo.

桑山正進 (1974) タキシラ佛寺の伽藍構成.『東方學報』京都 46, pp. 327 – 354.

桑山正進 (1978) ストゥーパ方形基台の由來.『足利惇氏教授喜壽記念インド學オリエント學論集』, 國書刊行會, pp. 197 – 212.

桑山正進 (1990)『カーピシー＝ガンダーラ史研究』, 京都大學人文科學研究所.

Kuwayama, S. (1991) The Horizon of Begram Ⅲ and Beyond : A Chronological Interpretation of the Evidence for Monuments in the Kāpiśī-Kābul-Ghaznī Region. *East and West*, 41/ 1 –4, pp. 75 – 120.

桑山正進 (1995) Shah-ji-ki Dheri 主塔の遷變.『東方學報』京都 67, pp. 408 – 331.

Kuwayama, S (1997) *The Main Stūpa of Shāh-jī-kī Ḍherī : A Chronological Outlook*, Kyoto.

Lüders, H. (1973) *A List of Brahmi Inscriptions from the Earliest Times to about AD* 400 *With the*

Exception of Those of Aśoka. Calcutta, 1912, repr. Varanasi, 1973.

Marshall, J. (1912－13) Excavations at Taxila. *Archaeological Survey of India, Annual Report for the years* 1912－1913, pp. 1－52.

Marshall, J. (1951) *Taxila: An Illustrated Account of Archaeological Excavations*, 3 vols., Cambridge.

Marshall, J. (1960) *A Guide to Taxila*, 4th ed., Cambridge.

Marshall, J., A. Foucher & N. G. Majumdar (1940) *The Monuments of Sanchi*, 3 vols., Delhi.

Mitra, D. (1971) *Buddhist Monuments*, Calcutta.

Mitra, D. (1981) *Ratnagiri (1958–1961)*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, 69, 2 vols., New Delhi.

Mizuno, S., ed. (1967) *Hazar Sum and Fil Khana: Cave Sites in Afghanistan Surveyed in 1962*, Kyoto.

森田慶一　譯注 (1969)『ウィトルーウィウス建築書 Vitruvii de architectura』, 東海大學出版會.

村川堅太郎　譯注 (1946)『エリュトゥラー海案內記』, 生活社.

Peppé W. C. (1898) The Piprahwa Stupa, Containing Relics of Buddha. *Journal of the Royal Asiatic Society* (1898), pp. 573－588.

Rea, A. (1894) *South Indian Buddhist Antiquities: Including the Stupa of Bhattiprolu, Gudivada, and Ghantaśala and Other Ancient Sites in the Krishna District, Madras Presidency*. Archaeological Survey of India, New Imperial Series, 15, Madras.

Sarkar, H. D. (1960) Some Aspects of the Buddhist Monuments at Nagarjunakonda. *Ancient India: Bulletin of the Archaeological Survey of India*, 16, pp. 65－84.

Sarkar, H. D. (1966) *Studies in Early Buddhist Architecture of India*, New Delhi.

Satya Prakash/P. R. S. Sharma, eds. (1968) *Baudhāyana-Śulbasūtram With Sanskrit Commentary by Dwarka Nath Yajvan, English Translation and Critical Notes by G. Thibout*. Research Institute of Ancient Scientific Studies, Dr Ratna Kumari Publications Series, 4, New Delhi.

Schlumberger, D. /M. Le Berre (1964) Observations sur les remparts de Bactres. *Monuments pré-islamiques d'Afghanistan*. Mémoires de la Délégation archéologiques française en Afghanistan, 19, Paris.

Sinha, B. P. /Sita Ram Roy (1969) *Vaiśali Excavations 1958–1962*. Patna and Allahabad.

Sircar, D. C. (1965) *Select Inscriptions*, 1, 2nd ed., Calcutta.

Sircar, D. C. (1963－64) Fragmentary Pillar Inscription from Amaravati. *Epigraphia Indica*, 35, pp. 40－43.

Sivaramamurti, C. (1956) *Amaravati Sculptures in the Madras Government Museum*, Madras.

Smith, V. A. (1969) *The Jain Stupa and Other Antiquities of Mathura*. Delhi, 1901, repr. Varanasi, 1969.

Snodgrass, A. (1988) *The Symbolism of the Stupa*, Ithaca.

Spooner, D. B. (1908－9) Excavations at Shah-ji-ki Dheri. *Archaeological Survey of India, Annual Report 1908–9*, pp. 38－59.

Toynbee, J. M. C. (1971) *Death and Burial in the Roman World*, London.

Tucci, G. (1971) Arrianus and Pāṭaliputra, Animadversiones Indicae. *Opera Minora*, 1, Roma, pp. 233－236.

Virgili, P. (1984) A Proposito del Mausoleo di Augusto, Baldassarre Peruzzi aveva ragione.

Archeologia Laziale, 6. Sesto incontro di studio del Comitato per l'archeologia laziale, Roma, pp. 209 – 212.

Vogel, J. Ph. (1929 – 30) Prakrit Inscriptions from a Buddhist Site at Nagarjunakonda. *Epigraphia Indica*, 20, pp. 1 – 37.

Vogel, J. Ph. (1947 – 48) Prakrit Inscriptions from Ghantaśala, *Epigraphia Indica*, 27, pp. 1 –4.

Warmington, E. H. (1974) *The Commerce between the Roman Empire and India*, 2nd ed., London and New York.

Wheeler, R. E. M. (1954) *Rome beyond the Imperial Frontiers*, London, 1954.